

翻訳

二胡情縁(6)

——二胡少年の夢——

趙 寒 陽 著／朱 新 建・王 紅 梅 訳

第六楽章 中学

私が通っていた中学校は常州市第六中学校であった¹⁾。その前身は1925年7月に創立された武進私立芳暉女子中学校で、現在ではすでに常州市田家炳実験中学校と改名されている。私がそこに就学した経緯とは、三人目の二胡の先生に因んだものであった。先生の名前は、儲坤元であった。

私は楊明德先生のところを卒業して以来、一年余りの間に、適切な先生が見つからないままに自力で練習を続けたが、あまり上達できなかった。その時何人かの音楽好きな仲よし同士が、よく集って「コンサート」を開いた。もちろんそれは音楽ホールで催される正規のコンサートではなく、皆が定期的に集まっては、順番を決めて演奏し、互いに鑑賞し合い、問題点を指摘し合うような集いに限った。

その時わが家はすでに「労働新村」に引っ越していた。引っ越した当初は、そこはまだ非常に荒涼としており、ただ孤独な四棟の建物が道路際に立ち並ぶだけであった。この砂石の道路はひとつの街灯さえなく、向かい側は広い耕地と無縁墓地であった。特に日暮れ後の風が吹く夜になると、本当に鬼火のまたたきを見ることもできたりして、私達には恐ろしくてたまらなかった。

建物の後ろに広い空き地があった。元は建設時に使われる建築材料の置き場であった。夏になると、どの家も早く夕食を済ませ、大人達は竹の寝椅子を運んでいき、子供達は小さな腰掛けを持って行って空き地に集まっては、「読み聞かせ会」或いは「コンサート」の開始を心待ちにしていた。その時代はまだ人々の家にはテレビがなく、ラジオさえ珍しい存在であったた

め、集まって一緒に物語を語りあったり、二胡の伴奏で歌って楽しんだりするのは、この地域の住民の主な娯楽のイベントになった。この空き地も自然に住民達のコミュニティーセンターになったわけである。

毎日のイベントは、いつも前の日の晩までに決められていた。前日の約束では、この日は、「読み聞かせ」のはずだった。しかし時間になっても語り手の姿は現れない。そこでお年寄り達は先に口を開いた。「嫦娥奔月」、「呉剛伐桂」、「聊齋」、「三国」など、津々浦々まで話を広げていく。しかし子供達はその様な話には無関心で、ぴいちくばあちくと騒がしくなってくる。そこでいらいらしてくる人がついにいつもの語り手担当の人を呼び出しに行く。三十歳ぐらいの大柄の男で、夕飯を食べ終わるのも待たないで引っ張られてくる。彼の姿を見ると、皆が落ち着いてくる。その大きな手で口を拭いては、昨日の続きをひたすら語っていく。どこからそんなに多くの面白い話を聞いてきたか、読んできたかいつも不思議に思った。「梅花党」、「ホームズ」、「一足の刺繍靴」など、その場にいる人皆を夢中にさせてしまう。語り方がうまいのも加わり、ビリビリと緊張感を漂わせる中、子供達も怖くなって一人でオシッコにいくる勇氣もなくなるほどであった。

私達もよく「コンサート」を開いていた。ただし演奏者は固定的ではない。通常私が二胡を、父はハーモニカを担当する。時折笛奏者や琵琶奏者を含め、ほかの二胡奏者やシンガーも誘ってくる。「洪湖水、浪打浪（洪湖の水は、浪打浪）」や「小曲好唱口難開（良い曲の口開きは難しい）」など当時ポピュラーな人気曲をよく演奏した。錫劇の「双推磨（ひき臼を回す二人）」も披露する。時には「紫竹調」を弾いてみると、いつもひとしきりの拍手を博する。今思えば、思い出には笛を得意とする友達の事が刻まれている。彼の年は私より二歳上で、笛の腕前といえば当時では本当に達人だった。私達は互いに慕い合いながら、よく一緒に「コンサート」で腕を磨く仲間だった。私は一度誘われて彼の家を訪ねることがあったが、家中が本当に赤貧洗うがごとしで、座るところもない状況だった。才能溢れる彼の身がおかれている状態を、私は大変不公平に感じ、良い笛を買って彼にプレゼントしたいと衝動的にも思ったが、突然彼のうわさが流れてきて、許されないことを敢行してしまった末学校から退校処分されたと聞いた。その後だんだんと付き合いも疎くなっていった。もう一人歌の上手な女の子もいた。家は水門橋の近くにあるという。我々は彼女の甘美な歌声に魅了され、彼女が「コンサート」に現れると、いつもより十倍ものやる気が出てくる。しかし半年ぐらい経たないうちに彼女はすっかりと姿を見せなくなった。それから聞くところによると彼女はよその地方に嫁いでいったそうだ。私はそれから彼女に一度も再会することはなかった。ただ思い出はずっと心の隅に残っている。このような「コンサート」は今日の音楽ホールで開催されるコンサートと比べてみると、形式的にも意味上においても、また思想や目的においても、同列に論じられるこ

とは無理であろうが、しかし私はいつも子供のころのあの「コンサート」は、一層音楽の本質に近づいているような気がしてならない。あんなに思う存分に音楽を楽しみ、その上我を忘れて音楽に浸かっており、全く功利的なものも伴わないわけである。毎回「コンサート」が終わり、皆次から次へと家に帰る時分、私はいつも一人で空いた敷地内に座ることが好きだった。仰向けになって、空の星を数えては、心の中でさっきまでの緊張感と達成感を思い出しては味わう。その楽しさは飽きないものだった。

家の建物の西端に、張其仁という父の同僚が住んでいた。彼は音楽が大好きで、家に当時では珍しい蓄音機がおいてあった。ビニライト製のレコードで音楽を流す機械で、スピーカーなどの設備も兼備されている。そのすべてが自分で組み立てたものだという。家には78回転盤と33回転盤のレコードアルバムのコレクションも豊富だった。そのオーディオ設備はモノラルのものだったが、当時では、ファナティック級の設備だったと言えよう。特にバイオリン協奏曲の「梁山伯と祝英台」や交響曲の序奏曲「ガーダー・メイリン」は聴いただけで心が打たれて涙ぐんでくるような感動を覚える。それで、私はよくレコードを聴くために彼の家にお邪魔した。彼は私達の「コンサート」にもよく足を運んでくれた。コンサートの終盤にはかならずコメントをつけてくれた。ある日、彼は特別なお客さんを連れてきてくれた。インドネシアからの帰国華僑の方で、同じく音楽が好きだった。彼はわれわれの「コンサート」の後に、満足できていないような様子で、皆が帰った後、わざわざ私に声をかけた。

「君の二胡、腕は確かなものだ。だけど弾いているのは歌曲ばかりだね。何か独奏曲を練習したことはないかい？」

「独奏曲？ 私が一人で弾いた曲だからそれは独奏曲なんじゃないの？」私は逆に聞き返した。

「やはり君、まだまだ若いね、これから見聞を広げよう。独奏曲ってね、専ら二胡のために作られた曲のこと。君が弾いていたのは歌を歌う人のために作られた曲。二胡だけのために作った曲じゃないわけ。二胡のプロを目指したければ、独奏曲を練習しなくちゃ！」

二胡に触れてからよく褒め言葉ばかり耳にしてきたためか、華僑からの指摘で心がなにもものに刺されたような感じを覚えた。

「だけど、どなたに教えていただくかな。いままで二人の二胡の先生について練習してきたけれど、独奏曲なんて話、聞いたことがないもん」

またいい先生に巡り合えればなと願って、私は誠心誠意を持って華僑に尋ねた。

「じゃあね、いい先生を紹介しよう。儲坤元という先生は知らないかな。芳暉女子中学校の数学の先生でね、大学時代、あの有名な二胡演奏家の張鋭先生の姪ごさんと同級生だった関係で、張鋭先生について何年間か二胡の腕を磨いたってことを聞いた。彼の腕前は少なくともこ

の常州市では三本の指に入ることは確かじゃないかな」

それを聞いて、私の心が躍起し、一刻も早くその先生と会えればと願ってやまなかった。

「じゃあ、いますぐその先生のところに連れてってよ」

と促した。

華僑はハッハッと笑い出し、腕時計を目の前まで運んでちらっとみて、

「君はせっかちさんだね。もうすぐ十時だよ。早くても明日になってからにしよう」

と答えた。

今思えば、当時では腕時計のような贅沢品は、やはり多くの「プロレタリア階級」にとって、手が届かないものだった。

「それでは明日、ぜひともよろしくお願いします」

私は行きたい一心の気持ちで頼んだ。

「いいよ、明日晩ご飯のあと、連れて行くから」

と返事してくれた。

ちょうどその時は「文化大革命」の最中で、「革命運動」実施中のため学校も休講連続で、学生達も登校不要で週に一回学校に戻って革命情勢の進み具合を勉強するだけだった。その翌日、私は学校へ行く必要もないし、二胡を練習する気にもなれなかった。ただただお日様が沈む時分を心待ちにしていた。晩ご飯を済ませたら新しい先生に会いにいけるのだという希望に掻きたてられていた。ようやく日が沈む時刻がやってきて、急いで夕飯を食べて出掛けた。華僑も約束の時間通りに姿を現した。二人顔を合わせると、すぐ芳暉女子中学校へと足を向かわせた。

その中学校は父の勤め先の近くにあった。時は「文化大革命」の最中で学校全体が休講中で、私達二人はひっそりと静まり返った校庭内を通路に沿って裏庭まで行った。そこに一列の古い平屋が見えてきた。そこは学校の先生達の宿舎だった。儲先生はこの建物の前後二間の部屋に住んでいて、奥様とお子様がいて、非常に狭い。お客さんが訪ねてくると、座る場所がないからいつも隣にある食堂に移動する。広い食堂には一人もいないから、儲先生の臨時応接間に早変わりした。

子供一人を連れてきた旧友の来訪に、儲先生はとても親切に私達をもてなしてくれた。インドネシアからの帰国華僑が私のことを紹介すると、儲先生は微笑んで言った。

「いや、いや、それは遠い昔のことだったよ。大学時代に張鋭先生について少し二胡を練習したことはあるけど、もう何年間も触っていないから、ほとんど忘れてしまったよ。興味があれば互いに習いましょう」

その時代は皆「謙遜すれば人をして進歩せしめる、傲慢であれば人をして遅らせしめる」と

いう毛沢東主席からいただいた教えを最高の教示として心に刻んだため、会話する二人もいつも、互いに習いましょう、互いに助け合おうと言いつたのであった。

儲先生は私に向かい、

「どうぞ一曲、演奏してみてください。私も習いたいと思って」とリクエストを出してくれた。

それで私は一番得意としている二曲を弾いてみせた。

それを聴いて儲先生は、

「ん！ なかなかいいね。ほかになにか、二胡の独奏曲でも練習したことはないかい」と聞いてきた。

「いいえ。二胡の独奏曲とはなにかもわかりません。習ったこともありません」と私は正直に答えた。

「へえ、惜しいことに、これらの独奏曲は今やもう禁じられていて、封建主義、ブルジョア主義、修正主義の代物だとか言われて批判されてしまっている。もし誰か演奏し出して紅衛兵²⁾に見つかったら、間違いなく大きなバッシングを受けることになるから、私はもう諦めるしかないと腹を決めたんだよ」

とここまで話すと、儲先生は多少感傷的になってきたようで、心の中ではやはり不平不満が溢れ出そうとしている様子であった。しかしそんなことは当時の幼い私には、理解できようもなかった。

「儲先生、僕を弟子にしてください。どうしても二胡を上達させたいんです」と私は切にお願いしてみた。

「それでは互いに切磋琢磨し合おうではないか。どうせ学校も休みだから、ここには誰も来ないし、君も来なければ毎日午後ここに来るが良い。一緒に練習しましょう」と儲先生はにこにこしながらそう話してくれた。宜興方言の訛りもうかがえるが、話し方がとても親切で親しみやすさを感じさせてくれた。

それから、私は毎日午後になると二胡を手にして儲先生のところにレッスンを受けに行った。儲先生はさすがに名人の指導を受けただけあって、その名に恥じないレッスンの進め方や二胡の弾き方を見せてくれる。それこそが二胡の世界を知り尽くした名人のあるべき姿だと思わせしめてくれた。前にお世話になった楊先生より一段とレベルが高いことは言うまでもない。

儲先生は私の二胡を見るや、

「君の二胡はなかなか悪くないが、独奏用の二胡ではない。錫劇伴奏用楽器の中ではメインを務める二胡に過ぎない。ほら、私の独奏用二胡を見てごらん」

と言いながら紫檀の六角筒の二胡を見せてくれた。それは一見して年代が経った古い二胡のようで木の色も元の紫色から黒ばんできた。早速弾いてみると、まろやかで深みがある音色が伝わってきてなかなか手に入らない二胡だと思った。儲先生は毎回その二胡を使ってレッスンをしてくれた。二胡独奏曲の『北京の金太陽』、『子弟兵と百姓』などを教えてくれた。その後、劉天華³⁾作曲の二胡作品も教えてくれた。出版された楽譜の教材がなかったため、父はわざわざ硬い厚紙を使って『二胡曲集』を手書きで写してくれた。中には劉天華の代表作品二胡独奏十曲及び阿炳の二胡曲三曲、他に『江河水』などもあった。儲先生のおかげで私の二胡演奏は前より更に上達した実感があった。

それから何ヶ月か過ぎて、学校は授業を再開して革命をすることになった。ちょうど私も小学校を卒業し、中学校をどうするかを考える節目に当たっていた。そこへ儲先生は、

「うちの中学校に来ればいい。今年から芳暉女子中から常州市第六中学校と改名されて、男子生徒も受け入れるようになったよ。それに我々の学校を接収管理したのはちょうどお父さんが働いている工場——大成第一工場に所属する工宣隊だ⁴⁾と薦めてくれた。

文革の期間中、労働者階級は指導者階級とされており、学校や役所などのような上部構造部門はすべて「労働者階級の毛沢東思想宣伝隊」によって接収管理され、学校の経営からカリキュラムの内容まであらゆる仕事は駐在の「工宣隊」の指図を伺わなければならなかった。この第六中学校を接収管理した大成第一工場工宣隊隊長の許寿坤氏が父と仲良しだった。副隊長の董彩珍さんは体が太っている年配のお婆さんで、代々赤貧の農民出身で、ずっと旧社会から苦しみが大きく特権階級への恨みが深い古参労働者であった。

これはまさに最善策ではないか。私も素直に市立第六中学校に進学した。その当時学校も兵隊のような軍事化管理が施され、全校は四つの「連」(中隊)に分けられており、実際には四つの学年であった。一つの中隊はまたそれぞれ四つか五つの「排」(隊)に分けられ、それは四、五のクラスに相当する。私は59名を有する第四中隊第四小隊に編入され、担任の先生は殷宝章先生であった。今までずっと大事に保存してきた当時の全校生徒の名簿を調べてみると、1967年9月に新学年が始まる当時には、常州市第六中学校は24のクラスを擁しており、全校生徒は計1346名も数えられていることが分かった。

学校が始まった後、時間割には国語、数学、物理などの時間が書き込まれているのは確かであるが、勢いすさまじく展開されている「文革」は正にキャンペーンの最中で、正常な教学秩序はなかなか確保できなかった。一学期は二十週間からなっているが、「学工、学農、学軍」⁵⁾という工場での労働体験時間、農村での畑仕事体験時間そして軍隊での訓練時間は合わせて三分の一か半分ぐらいのもの学校時間を占めていた。実を言うと、我々子供達は「学工、学農、学軍」の時間を好んでいた。授業を受けなくても済むし工場に、田舎に、そして軍隊にも遊びに

行けるから、今でいうテーマパークに遊びに行くような気分であったろうか。労働や訓練で体力を使うからある程度辛さも伴うが、子供達には面白味が尽きない行事であった。

「学工」とは、学校を接収管理する工場で労働体験をすることである。私達は言うまでもなく、新学期早々から大成第一工場へと派遣された。私達の中隊で計233名の中学生が工場の各部屋に配分され、私と顧建一君ら四、五名前後のクラスメートは食堂に配分されたのであった。

大成第一工場の食堂は実に広い。この食堂一つで工場で働く労働者3000人余りの食事を賄うことになっている。私達のタスクは米を研ぐことと野菜を選別することで、董師匠という方が指導に当たってくださった。学生達に技能を伝承し、さらに応援及び指導をしていくことが董師匠の任務であった。師匠は上述した我が学校工宣隊副隊長の董彩珍氏の兄で、妹さんと同じように肥満ぎみの体形で声のトーンが高めのベテラン料理人であった。彼は私達のことをとても可愛がってくださっており、でかいお皿に入った「卵の皿蒸し」が出来上がると、いつもナイフでカットして一人ずつ割り当てて賞味させてくださる。その代わりにもしもだれかが仕事をいい加減にすると、彼にバレたら必ずそのトーンの高い声で怒鳴ってきて、もう二度とあんなに怒られたくないなと決心するようになる。私達は毎朝食堂に着くと、まず董師匠を伺って仕事開始を報告する。その時間には董師匠がいつも紫砂急須を手にしてゆったりとティータイムを楽しんでいるところであった。そこから私達の中の二人が力を合わせて一つの大きな盥を担いで米を運びに米蔵に向かうのであった。その盥は家族用の風呂桶の大きさはあるのではないか。米蔵に着くと、その担当のおじさんが米の袋を掴みあげてはバシャッと一気に注いでいく。二五キロ詰めの袋を全部投入してもまだ盥の大半にしかすぎず、そこからまた一つ米袋を開けて半分ほどを投入する。その大きな盥一つで三、四十キロ位の米を運ぶことができる。私達二人でそれからヨイショ、ヨイショと息を合わせ、米が目いっぱい入っている盥をとある水槽の方へと運んでいく。水槽の半分ぐらいまで水を注ぐと、盥を水槽の中に入れて長い道具で米をかき混ぜる。暫くしてから水槽の水を流して蛇口を開けてさっきの動作をもう一回繰り返す。その蛇口といえば、消防隊用の蛇口でもそれ位の大きさではないだろうか。何分間の間もなく水槽を全部満たせるものであった。米を研ぎ終わると大きな木製の桶に入れ替えてまた米蔵へ行ってさっきのことを繰り返す。午前中だけで四回ぐらい繰り返さないといけなかった。それで計百五十キロ位の米を研ぐことになったのではなからうか。それこそ本当に体力が必要とされる力仕事で必ず毎回はあはあと息切れしそうになって体中汗だくになってしまう。やがて米研ぎが終わると次のステップは米を分配することであった。一平方メートルぐらいもありそうなかき蒸籠に整然と百余りものエナメル質の茶碗が並べられてある。私達は計量用の金属コップを使って米を計って入れていく。コップ一つは100gで茶碗一つにつきコップ一杯分の米を入れていく。次にゴム製のホースを取ってきて竜が頭を頷くように一つず

つ茶碗に水を足していく。それこそが大変高度な技が必要とされる仕事で、少しでも水が少ないと出来上がったご飯が硬くなるし、水が多いとご飯が柔らかすぎるようになりがちなのである。私達が来た当初はこの職人任せの仕事だけを師匠がやらせてくださらなかったが、何日か経ってからやっと試しでトライさせてくれるようになった。しかしこの水の量のコントロールはやはりうまくいかず、結局蒸しあがったご飯は硬かったり柔らかかったりする。昼ご飯の時間になったら、さすがにこのご飯の硬さがばらついているのは何故だとクレームをつけに来る社員がいた。そこで董師匠は、

「我々の革命の卵ちゃん達が労働体験にきておるのじゃ。それは革命の後継者を養成するために極めて大事なことじゃないか。何かお気に召さないことがあれば本当に申し訳ございませんがどうぞ大目に見てやってくださいな」

と説明してくれると、皆の不満も静まってあれこれ言わなくなった。

こうして、蒸し茶碗に水を加えたらその蒸籠を釜に載せていき、それからまた二枚目を重ねていき、一回の食事では十数枚かを用意しないといけなかった。この釜は一般家庭で使われている鍋とは断然違うもので、鍋でお湯を沸かして蒸気を作るのではなく、液体を加熱して蒸気を発生させるボイラーという装置に直接つながっており、バルブをねじると水蒸気はぐうぐうと噴き出してきて、我々には本当に珍しくてすごいものに見えた。すこしうっかりしていたら即座にやけどしてしまうので、このバルブを触ることだけは最初から最後まで師匠に許されなかった。必ずご本人がねじることになっていた。

米を研いでご飯を炊く仕事は体力を消耗するもので疲れはするが、あちらこちらと動き回るので私にはそれなりに面白味もあった。しかしこの野菜の不可食部分を除去するという仕事は心からやりたくなかった。野菜といえばハウレンソウやニラ、青菜などがあるが、いつも床に小山のように置かれており、二人で選別仕事に取り組むことになっている。二人は一つの小さい腰掛けに座り込んですべての野菜をやっつけるのに二時間余りも要していた。それは中学生には大変退屈な仕事で、とても忍耐力が鍛えられる仕事であった。それで私はいつも米研ぎの仕事の方に我も我もと走って行く。この工場見習いは基本的に昼間勤務であり、普通は午後三時半になると終了。他には紡績部に派遣された女子中学生もいて、彼女らは中間勤務だといわれ、午後二時から夜十時までの勤務時間であった。二週間の工場見習い期間において同級生達は皆それぞれ違う職場へと派遣され、普段会う機会も少なかったので見習い期間が終わって皆また教室で顔を合わせる時になるとより一層再会の喜びに満たされていて互いに語りあうものが尽きなかった。

1967年は「文化大革命」の中期に当たっており、学業は実に楽なことであった。当時は「張鉄生式白紙の回答」というような学習ムードが流行っており、学生に対して教師も多くは求め

ず、勉強意欲のある人はたくさん勉強すれば良いし、勉強意欲の無い人はさほど勉強しなくても良い。試験で100点を取れても褒めもされないし、20点でもお説教はされない。

私はクラスでは学級委員でも何でも無い平の中学生の一人であったが、成績はいつも85点以上を維持しており、人も正直な性格で誰にも媚びないし誰をもいじめることはない。そのためか私は先生のお気に入りの学生であったが、同級生の中では数人の成績が優秀な人とは気が合っていて仲がよかったが、ほとんどの人には本に没頭するバカまじめの読書虫で仲間外れの印象が強いらしく、よく背後で笑い種にされたり、時には目の前でからかったりもされていた。

こうして二、三週間の授業が進んでいき、今度は秋の収穫の時期がやってくる。学校はまた中学生達を郊外の人民公社に学農⁶へと連れて行く。早朝、皆運動靴を履き、麦藁帽子を被り、お昼の弁当も用意して学校で集合する。整列したらすぐ目的地へと向かう。皆は教室で何週間も籠っていたので、キャンパスを出たら恰も子鳥がやがて森に戻ったような感じで、またアヒルの群みたいに歓声や笑い声が尽きなかった。

生産大隊に着き、隊長さんは皆を水田のほとりまで案内してくれた。一見してここは一面に広がる水田であった。私達の任務は稲を刈ることで、鎌を一本ずつ配られた（この鎌は稲刈り専用で、柄が短く刃に鋸の歯がついている）。最初は少し不慣れなもので、進み具合もゆっくりめだったが、あくまで単純な動作の繰り返しだけなので、すぐに慣れてきた。先生はまたやる気を引き出すために、だれが早く見栄よくできるかを競い合ってみようではないかと呼びかけてきた。見る見るうちに黄金色に立っていた稲が一時間以内で横たわる状態にされていた。皆が汗びっしょりで足も泥塗れになり、腰も丸まってしまいが、気分上々であった。

お昼の時間になり、皆暇道に座り込んで持ってきたお弁当を大変美味しそうに食べている。本当のことを言うと、皆があれだけ美味しそうに食べていたのは、ご飯のおかずが美味しいか否かとは全く関係なく、お腹がペコペコだからだけなのであった。お昼を済ませてすこし休憩したらまた稲刈りを五時まで続けなければいけなかった。一日の仕事が終わり、自分の労働成果を目の前にしては皆が一種の達成感に満たされ、心の中では大喜びであった。川辺に行って手足の泥をきれいに流し、また整列して帰路を辿っていく。当時は町の規模がそれほど大きくなく、郊外の環状道路に向かって四、五十分も歩けばもう一面の野原が目に入ってくる。したがって、私達の「学農」——農作業体験の現場にはいつも徒歩で往復するのであった。

次の日、皆がまたいつも通りに登校し、整列したら「学農」へと徒歩で向かうのであった。今度のタスクは肥料を撒くこと、つまり手で肥料を細かく砕いて均等に撒き散らしていくことであった。その肥料はどのようにしてできたかという、何ヶ月前に人民公社の社員達が田んぼの辺に大きい穴を掘り、そこに家々から運んでくるブタ小屋にあったブタの糞、村の便所に蓄えた人間の排泄物、それに取り除いた野菜の不可食部分等をひたすらそのでかい穴に投入

していく。一つ埋まったらまた次の穴を掘っていく。それで数ヶ月の堆積発酵を経て、その穴が品質優良の天然有機肥料の倉庫へと変身していくわけであった。

辛さと汚さの代名詞となり得る畑仕事を嫌うというプチ・ブルジョア思想を打ち破るために、仕事を開始する前にいつも毛沢東主席の最高指示と言われる「一に苦しみを恐れるな、二に死を恐れるな」という決まり文句を暗誦することになっている。それから班長は率先して穴の中に飛び込んでいき、シャベルを使って肥料を掘り出してかごへ詰めていく。かごがいっぱいになったら二人で力を合わせて畦まで運んで行き、一定の間隔をおきながら田んぼに堆積していく。それから残りの人達が手で肥料を細かく砕いてから田んぼにばら撒いていく。ここまでのステップはすべて素手でやり遂げることになっている。もし誰かが手袋を嵌めてやったら、その行為がもうブルジョア思想の芽生えだとされて酷い批判を受けることから免れなくなる。そのため、一日働いたらその後いくら手を洗っても何日間もその臭みが消えないのであった。

一週間の農作業体験は私達の労働意識を高め、労苦を堪忍する風骨を鍛えた上、「誰知盤中餐、粒粒皆辛苦」（「我々が食べているお皿の中にある粒粒の米は、どれだけ苦労して作りだしたものだろうか」というあの有名な唐詩の一句に含まれる深い意味を味わわせてくれたのであった。

やがて工場研修も農作業体験も終わり、これで安心して学業へとウェイトを置けるかと思いきや、今度は毛沢東思想文芸宣伝隊を結成しようと、「常州市紅衛兵代表大会」が歌や舞踊に長けている隊員を選抜するために市内の小中学校にやってきた。我が六中に至っては、学校はそれを政治任務として扱い、校長先生自らが会議の司会を務め、各担任先生の推薦で上がってきた十数名の学生を選抜試験に指名した。その結果、二人だけが選ばれることになった。その一人が尚志芬さんで、もう一人は私であった。学校はまたわざわざ盛大に歓送会を開き、大輪の赤い花を私達の胸に付け、双桂坊に設けられた「常州市紅代会毛沢東思想宣伝隊」の本部まで見届けてくれた。それから、私は毎日二胡を背負って、「紅代会」に通うことになった。

「紅代会」の毛沢東思想宣伝隊にいる間、毎日リハーサルが行われていた。曲目は他でもなくあくまでも毛沢東思想の宣伝や「文化大革命」を謳歌する内容に関するものばかりであった。形式上には声楽、踊り、器楽による独奏、ミニ合奏、快板書、三言半などの演出があった。時は市内における他の文芸団体がすべて麻痺状態を呈している状況下であり、この宣伝隊はいわば常州市民が求める文芸活動においては唯一の演出団体となったため、公演日程が常にぎっしりと組み込まれており、演出する先々でいつも熱烈な拍手を浴びるのであった。

公演のプログラムに私の二胡独奏は定番となっていた。演奏する曲目に毛主席語録の歌、『北京の金太陽』などが挙げられる。公演は一つ特筆すべき特徴があった。跪いて演奏しなけ

ればならないというものであった。当時我々は工場や農村、そして部隊に出かけて公演する時、屋外の空き地や広場を舞台に利用する場合がほとんどで、観客が並んで輪を作るように人垣ができた時点でもう腰掛け等もないままの開演となる。それに、演奏を聴いてくださる工場労働者の方々、農作業に従事するの方々、そして兵隊の方々に同じプロレタリア階級としての無上の尊敬の意を表すためにも、「紅代会」の責任者は私達に片ひざを地面に付ける姿勢で演奏するよう要求していた。そして服装はいつも緑黄色の軍服で腰にベルトをきつく締め付けている。頭には軍帽をかぶっている。私の番になったらいつも力強くたくましく元気はつらつそうにぱっぱと人垣でできた輪の真中に出て、左手には二胡を、右手でぱつと軍隊式の敬礼を行なう。と同時に体も左へ右へと一回ずつ軽く回転しなければならない。来場者のすべての方に尊敬の意を表すためであった。続いて司会者が登場し、演奏曲名をアナウンスする。ただし演奏者の名前を観客にアナウンスすることは決してない。自分の名のため、自分の利益のため、というのは典型的なブルジョア階級の思想とされて文革最中の当時では真向から批判するものであるためだ。司会者が去っていき、私は片方の膝を地面につけて半ば跪く姿勢でリズムカルに弓を引き始める。一曲終わるといつも熱烈な拍手を浴び、二回も三回もアンコールを受けることが常であった。私の演奏は工、農、兵の方々より幅広い好評を博したことで、「紅代会」宣伝隊での自分の地位を築き上げたことは言うまでもなからう。「紅代会」は数回にも亘って私の母校である第六中学校に私の仕事に対するまじめさを表彰する手紙を宛てたほどであった。

私が最も印象深かったのは、常州市羅墅湾軍用空港での慰問公演の時であった。「八一」建軍節を前にしたある日の午後一時過ぎに、部隊に派遣された車が「常州市紅衛兵代表大会毛沢東思想宣伝隊」本部に到着した。兵士を運送する時に使われる軍用トラック二台であった。その時私達隊員は全員軍装を纏い、隊長の引率によって列に並んでトラックに乗り込み、整然とした隊形で席に着いた。道中また革命歌謡を歌い続けており、正に意気鷹揚で我々の革命戦闘精神をひけらかす気配も窺わせたのではなからうか。

羅墅湾軍用空港に着くと、解放軍の兵士達が列を作って宣伝隊の到着を歓迎し、私達は隊旗の先導に従って入場した。今回は皆ベストを尽くして演出し、戦士達の拍手も非常に熱烈であった。見ている観客の皆が開演前に鑑賞のルールを言い渡されたようで、一曲が終わった途端に、必ず一人の小隊長若しくは中隊長が拍手をリードし、兵士達も直ちに熱烈に加わり、リーダーがとまったら、場内も直ちに静まってくるのであった。

終演後、軍隊指導者の方々が舞台上上がって出演者の皆と親しく握手し、記念写真も一緒に撮ってくださった。それからメイクを落として着替えも済んだら、一人の中隊長が我々を食堂まで案内してくださった。食堂の入り口をくぐっていないうちに真向から漂ってくる美味しそうな食事の香気で思わず涎を垂らしそうになった。食堂に入ってみたら白菜入りの湯麺が数個

の大きな盥に盛られて四角いテーブルに置いてあったのがすぐさま目に入った。湯気が立っていて実に美味しそうであった。ゴマ油もたくさん垂らしてあったようで、道理で扉の外までもいい匂いがぷんぷんと伝わってきた。それは私にとって二胡を以て稼いだ初めてのワーキング飯となる。あんなに食欲をそそる美味な物を今まで食べたこともないような極上の味わいで今でも決して忘れることはない。食べながらも心の海は怒涛のように澎湃としていてなかなか静まることはなかった。それから、二胡を生涯の仕事にしようとする決意が一層固まったのであった。

羅墅湾から帰宅した時分はもう夜九時を過ぎていた。しかし波のように激しく揺れ動く気持ちなかなか静まらなかった。その晩祖母と父に生き生きと道中にみた景色、演出現場の盛況等の一つ一つ分かち合った。特にあの大きい盥に盛られた湯気が立っていて世界一美味しかった白菜入り湯麺の話になると、なおさら感動と興奮を隠せなかった。遅くまで眠れない一晩であった。

宣伝隊ではおよそ一年の時間を過ごしたが、振り返ってみると引き締まった緊張気味の雰囲気の中ではあったが、有意義で愉快的な一年でもあったと言えよう。「紅代会」の責任者が、「毛沢東思想文芸宣伝隊」は既に宣伝の任務をすばらしく果たしたので、即日から解散し、各自所属学校に戻って学業を続けるよう宣告した時、皆しみじみと名残を惜しんでいた。女子生徒には涙をこぼした人もいた。私は第六中学校の四中隊四小隊の教室に踏み込んだ時、先生とクラスメート達は皆起立し拍手をして私の帰りを歓迎した。まるで里帰りした英雄でも歓迎しているようであった。後で聞いて分かったが、私が帰る前に「紅代会」から既に母校の責任者宛てに赤い表彰状が届いたようだ。

時はすでに中学二年目に入ったが、私はただ一週間だけで皆の教科書の進み具合に追いついた。一回目のテストで平均83点の成績を取れ、一番点数の低かった英語も75点であった。それも正に当時の教科書の進み具合がどれだけゆっくりめであったのかを物語っていよう。数学だけでも例に取って言えば、中学を卒業する時に至っても、結局のところ一元二次方程式の解法まで学び終わる位であった。

中学二年目の一年間、私は何とか学校で身を入れて二学期までも授業を受けることができた。いつも放課後は儲坤元先生のお家にお邪魔して二胡のレッスンを受けに行くが、通っているうちに、だんだんと儲先生も私の指導に当たって力不足だと感じていることに気付いた。レッスンと言うものの、二人で一曲を弾くなり、四方山話をするなりで一緒に時間を過ごただけであった。当時第六中学校にもう一方の二胡ができる宗麟という先生がおり、学校の芸術活動の顧問を務めておられた。宗先生ともよく二胡について切磋琢磨する時間を共に楽しんでいた。それこそが忘年の交わりと言えよう。

そして中学の二学期目に私の芸術生涯において計り知れないほど重大な意味を持つ出来事が起きたのであった。それは他でもなく常州市で大変有名な民楽指導者の劉逸安先生に師事するようになったことであった。今振り返ってみると、それは冥々たる運命において必然的に起こり得ることのように思われるが、当時のきっかけというと、また確かに偶然的な機縁に過ぎなかった。

その当時私の家は労働新村に位置していた。この住宅区の前後のスペースは皆空き地であったため、住宅棟の住民が皆そのスペースを有効利用して家々にそれぞれ鶏を十数羽飼育していた。生活食料品が欠乏している当時の時代においては、鶏の飼育は食卓を豊かにする大きな手助けとなっていた。また政府側も住民の自家副業としての鶏やアヒルの飼育が当時食料品供給上の切迫状態に対してある程度の緩和策となり得る考えから、自家飼育を激励する方針であった。それに毎月一世帯毎に「政府供給書」を頼りに市場より低価格で五キロの飼料、若しくは米ぬかか穀粉を購入できるようになっていた。その中極めて経済的に困窮している家庭は穀粉を手に入れてはお粥に煮込んで人間が飲むようにした場合もあったらしい。

ある日曜の午前、私は広化橋にある穀物供給ステーションに飼料を買いに出かけた。橋を渡るところから供給ステーションの入り口にはすでに長蛇の列ができたのが見えた。本当に物質的に欠乏している時代で、この米ぬかや穀粉にしても時間的に後になると手に入らないケースも多々ある。私は一刻も躊躇わずに急ぎ足で駆けつけて列に並んだ。

なんて長い列であったろう。一、二時間も経たないと私の番に回ってこなかったろう。心の中で苛立ってきたところ、どこからか笛や琵琶の音色が伝わってきた。いや、二胡の音色も中に混ざっている。心が一気にそちらの方に惹きつけられていった。列の前を見渡すと少なくとも十数メートルはあったろう。

それで私の次に並んでいる中年の女性に、

「こんにちは。あの、覚えてくださいますか。私の番がここだね。ちょっと行ってきたんですけど、すぐ帰ってくるから、戻ってきててもまたここに立ってもいいですか」とお願いした。

本当に優しい方で、それにこの礼儀正しい子供にも見えた私を、可愛く思ってくくださったか、すぐ納得して、

「分かった。行っていらっしやい。早く戻ってきてね」

と言ってくれた。

私はすぐに「ありがとう」とお礼をし、あの音楽の元を探って街の向こう側に駆けて行った。

この広化橋が改築された時に一層高さも増し、加えて長い導入橋も増築された関係で、本来

両側に位置している家々が却って橋の下に取り残されたというようなイメージを伺わせている。橋の上から飛んでみると橋下にある家屋の屋根にもひと跳びで行けそうな感じでもあった。まさしくこのような橋の高さよりずいぶん低く並んでいる平屋の一室に、何人かの人が集まっていて合奏していたのだった。戸が閉ざされているものの、美しい楽器の音色が依然として空いている窓から外の世界へと漂っていったのであった。ちょうど私にもお馴染みの曲『紫竹調』の合奏をしていたところで、私が夏の「納涼音楽会」ではよく披露する曲でもあった。私が外で聴いていくうちに、心の中で透き通った泉がすすすがしく湧いてきたような感じがして気持ちがすっきりした。

その曲が終わると、私は扉を叩いてみた。扉が開き、二、三平米の部屋で楽器を手にしている二十歳前後の青年三人が目に入った。入り口に十二、三歳ぐらいの少年が立っているのを見て、

「なんか用？」

といたずらに來られたと勘違いしているかのようで怒り出しそうな口ぶりで聞いてきた。

私は自分が訝しくないよと急いで釈明した。

「あの、こういうことです。私は向かい側の供給ステーションで飼料を買うために並んでいたらこちらから素敵な音楽が聞こえてきたので気になって見に來ただけです。私も二胡ができるのです。さっきの『紫竹調』も弾けます」

それを聞いた三人は半信半疑で、

「君も二胡ができるって？ じゃあ、一曲弾いてごらんよ」

とリクエストしてきた。

「やった！ まさに私の思う壺だ」

と私は心の中で歓声を上げた。人前で二胡を披露する、それこそがわざわざ長蛇の列を抜け出してここまでたどり着いた目的であった。それですこしの躊躇いもなく、私は二胡を奪い取るかのように手に取ってきて『良宵』という一曲を弾いて見せた。

一曲が終わると、青年達は驚いた感を隠せなかった。

「それ、私達よりもうまいじゃないか。お家はどこかい。この近くに君みたいな子がいるなんて全然知らなかったよ」

私はにこっと笑って、

「労働新村に住んでいます」

と答えた。

青年達の内の一人在、

「今晚は時間があるかい。僕の先生のところへ連れて行こうか」

と声をかけてくれた。

二胡の先生をお伺いしに連れて行ってもらえると聞いて、さぞ腕前が大した人物だろうと推測した私は大喜びで快く約束した。

それで三人と別れを告げてまた街の向こう側に戻っていき、順番を約束通りに守ってくれたおばさんにお礼をして、また列に入って並んで順調に飼料を買って持ち帰った。

その後晩ご飯を済まして、私は約束通りに二胡を持って橋の下のあの狭い平屋に行った。ドアは開いたままで、自分の先生のところに連れて行ってくれると約束したあの青年が中でご飯を食べているところだった。そこに現れた私の姿を見てとても親切に部屋に入るよう呼び掛けてくれた。

「一人でここに住んでいるの？」

という私の問いに、彼は

「そうだよ。何年か前に中学を卒業した後、知識青年は農村体験に行くべしという毛主席の呼び掛けで農村に畑仕事に行ったわけ。両親もいなくなり、この平屋だけ残してくれたんだ。そのあと農村から戻ってこられても、仕事にもつけていなくてさ、親の元の仕事先からある程度救助金をもらえるから、それで何とか暮らしている。普段は暇だから琵琶を弾いたりして気が合う仲間何人かと楽器を弄って楽しんでいる⁷⁾と、身の上の話も明かしてくれた。いかんともすべなしのような口ぶりで語っている。

「じゃ、二胡の先生とは、何とおっしゃいますか。どこに住んでいるのですか」

と私はまた聞き出した。

「先生のお名前が夏志文。すぐその橋の下の大工町に住んでいる。もう先生と約束しといたから、後で行こう」と、彼は話しながらご飯をはやく食べはじめた。

晩ご飯を済ませて、私を連れて大工町に向かった。ある庭の入り口辺りに着くと、青年は「夏先生」と大声で呼び出した。

「はい。どうぞお上がりください」

返事と共に、三十代の中年男性が庭から私達を迎えに出してきた。

夏先生は暖かく私達を奥の方に通してくれた。見るとここはかなり年数が経った古い家のようで、北向きであるためか室内は暗かった。壁にはマホガニー製の琵琶が一本かかっている。それが古めかしい家具に映えてさらに来訪客に家主の文化教養の奥深さを誇示しているようであった。

皆席に着き、互いに自己紹介も終わると次は私の演奏を聴いていただく番であった。全く面識もなかった先生を前に演奏するわけで、私はやや緊張して一曲を演奏した。

夏先生は静かに最後まで聴いて、拍手もせずに、否定の言葉もなかった。ちょっと考え込ん

でから夏先生は言った。

「うん、なんて言えばいいんだろう。歳が若いわりにここまで弾けるとは本当に大したものだ。しかし、私から見れば、どうもどっか足りないような。やはり専門的な訓練を受けていないからかな」

そんなことを聞いて、私は空かさずお願いしてみた。

「それでは夏先生、私を弟子にしてください。先生の指導で専門的な訓練を受けたいです」

すると夏先生はにこっと笑って、

「琵琶なら教えられますけれど、二胡は私には無理ですね。他に二胡の先生をご紹介します。ただしその先生に私も会ったことがない。友達の話では彼はこの常州市の二胡奏者の中では一番だと言われているんです」

腕のいい二胡の先生を紹介してもらえると聞くといつも気ぜわしくなる私は、また空かさずに、

「それはすごい！ じゃ夏先生、今すぐその先生のところへ連れてってください」

それを聞いた夏先生はまたハッハッと笑った。

「君は本当にせっかちですね。今日はもう遅いから明日はどうだい。それにその先生が青山橋に住んでいるので自転車で行っても四十分はかかるんだぞ。じゃ、こうしよう。明日の夕方、早めに晩ご飯を済ませてまたうちに来なさい。それから一緒に向かいましょう」

翌日の夕方、私は晩ご飯を済ませ、父の自転車を漕いで夏先生の家に来た。夏先生はすでにご飯を食べ終わって私を待っているところだった。そこから二人で揃って自転車で青山橋に向って出発した。

私は道が分からないのでひたすら夏先生に付いて前へと進むしかできなかった。紅梅公園に近づくと、真っ暗闇となった森を見て思わず心細くなった。

「遠いなあ。夏先生は私を騙していないよね。いやいや、子供を騙してなんの意味もないね。『犬が呂洞賓にほえる』って、やっぱ先生を信じよう」

私達は少なくとも四十分か五十分ぐらい自転車をこいでいた。やがて青山橋に辿り着いた。劉逸安先生の家はちょうど青山橋に面していて、左も右も店舗なので真ん中だけ住居だと、分かり易かった。

また如何にも古めかしい家であった。門も古風な石臼に支えられている木製のものであった。夏先生は門をノックしてみた。すると門が開いて、少年が一人出てきた。一見して私より三つか四つぐらい上のような感じの少年であった。

「ごめんなさい。ここは、劉逸安さんのお宅ですか」

と夏先生は礼儀正しく尋ねてみた。

「はい。兄は不在で、私は弟です。何かご用がありましたらお伝えしますので」と少年が答えてくれた。

「実は友達で紹介で来たのですが、劉逸安先生は常州市で二胡が最も上手な方だと聞いていますが、だいぶ前からお伺いできればと思っていましたがちょうど二胡の才能がある生徒を見つけたので」そう言いながら私の方を指さして、

「劉先生の弟子に紹介しようと思って今日はわざわざこの子を連れてきたのです。生憎ご不在ですね」

と惜しげに言い加えた。

「兄はふだんあまり外出しないのですが、大体二胡を弾いているか囲碁を打っているかで家にいる時間の方が多いのです。今日はあいにく用事があって出掛けていったのです。こうしましょう。兄が帰ってきたら今日のことをお伝えしますので、明日また来てもらってもいいですか。家で待つように言っときますので」と、

劉先生の弟が優しく言ってくれた。

夏先生はすこし考えて言った。

「明日は、私が用事で来られないのですが、この子だけで来てでもいいかな」

「どうぞ、いいですよ。私は劉逸康と言います。必ずお伝えしますので。ところで、お名前をお伺いしてもいいですか」と、劉逸康さんは自己紹介しながら親切に聞いた。

そこへ夏先生は、

「私は夏志文と言います。君は……？」

夏先生はまだ私の名前を聞いてなかった。

「私は趙寒陽と言います。寒冷の寒で、太陽の陽です」と、私は自己紹介した。

「では、あなたは夏志文さんで、彼は趙寒陽ですね。では明日またこの時間に来てくださいね」

劉逸康さんはずっと笑顔で親切に対応してくれた。

私達は劉逸康さんに別れの挨拶をし、また自転車に乗って帰路に立った。夏先生も私もずっと口を閉じたままで自転車を漕ぎながら各々の事について考え込んでいた。遠路遙々訪ねに来たが、劉先生に会えなくて残念な気持ちと、同時に未来への夢も膨らんできた。人間とはやはり明日の希望があるから、生きていけるのではないか。希望がなければ、生きていけないだろう。

翌日私は教室にいながら、夕方師匠に会いに行くことを考えていた。授業も心あらずだった。午後学校から帰宅すると晩ご飯の支度を早くしようと祖母に催促しながら、今度は師匠の前で自分の見せ所を披露しようとお飯を待っている間も二胡の練習をしていた。前回夏先

生の前での演奏は緊張と準備不足で思う通りに行かなかったため二度と後悔しないようにという思いで胸がいっぱいだった。

午後五時過ぎに、私は晚ご飯を済ませ、二胡を背負って出発した。私一人で町を横切ってあんなに遠い青山橋に行くのに祖母と父はとても心配で、自転車ではどうも覚束ない気がしたらしくほかの方法もないか勧めてきた。それでは歩いていこうと私は覚悟した。若いから使い切れないほどの力だけはある。バスで行くなら一本で行けるが片道で八銭しかかからないにせよ、往復では一角六銭にもなり、それは経済的に豊かではない我々の家族には一日の食事代に値する。

二胡を背負い、私は胸を張って師匠に会いに歩き出した。前途遼遠感が沸き上がった。本当に遠かった。一時間半も歩いてやっと青山橋に到着。流石に息が荒くなった。劉家に着いてノックすると、やはり弟の劉逸康さんが開けてくれた。私を見るとすぐに親切に家に通してくれた。

「よく来たね。兄は大分待っていたよ」

「あ、すみません。今日は歩いてきたのです。一時間半かかりました」

そこへ部屋から一見して二二、三歳の青年が出てきた。背丈がさほど高くない丸い顔だちで質素な身なりをしていた。彼はにこにこしながら、

「兄の劉逸安です。君が趙寒陽君ですね。さあ、どうぞお入りください」

と親切に部屋へ案内してくれた。

「劉先生、初めまして、今日は、夏先生は用事で来られませんので、一人で来ました」

私は言いながら思った。常州市内で二胡の一番の先生というと、三、四十歳であるはずだろう。どうしてこんなに若いのだろう。まるで自分の兄のようだ。

家に入ってみると、壁に窓もなく、昼間でも電気をつけないといけない。唯一換気できる場所は街道に面した門だけだった。奥と外の二部屋だが、家族五人住んでいる。劉逸安先生と両親、弟さんに妹さん。したがって通路にも板ベッドが敷いてあった。居住条件は極めて悪い。

腰を下ろすと、私は自分の二胡歴を簡単に話した。すると劉先生は言った。

「さあ、弾いてみてください」

私はケースから二胡を取り出すと劉先生は受け取ってこう言った。

「これ、戯曲伴奏用の二胡だね」

「はい。そうです。二番目の先生から頂いたのです」

私は真剣に『良宵』と『病中吟』を弾いた。十分に準備してきたつもりでいたので、自分の中ではよくできたと思った。しかし劉先生は聴いて、無表情でしばらく黙っていた。たった一、二分間だけだったが、一年もの歳月が過ぎたような気がした。今まで演奏すると、ほとん

ど拍手や歓声を浴びるが、劉先生が黙っていることは、もしかして気に入らず弟子にしてもらえないかもしれない。

とうとう劉先生は口を開いた。

「自分ではどう思いますか？」

「まあまあできました」上手だったと言うのもなんか恥ずかしい。

「君はすごく二胡が上達したいと思っていますか？」

もちろん、二胡がもっと上手になりたいから遠路遙々先生に会いにやってきたのだ。そして私は堂々と答えた。

「私は二胡を学び始めた八歳の時から、二胡で飯を食っていき、二胡で出世すると誓っていました。二胡が上達できれば、どんなに辛くてもやります」

「よし！」

劉先生は続けた。

「私も小さい時から二胡を習って、そこから大きな夢を抱いてきました。とにかく音楽学院に入って勉強したかったのです。1967年に高校を卒業して上海音楽学院の入試を受けたら意外にも受かりました。しかし「文化大革命」勃発の影響で上海音楽学院は今期の入学を取り消したんです。こうして私は進学先を失ったまま家にいることになって、あつという間に二年も経ってしまいました。プロレタリア階級に属さない家庭の出身の関係で、今からでは私が夢を叶えるのは到底難しい。なので弟子を一人受け入れて、自分の抱負を伝えて、最終的に夢を実現させたいとずっと思っていたのです」

私は静かに聞いているうちに、劉先生の事を尊敬せずには居られない気持ちになった。先生は水を一口飲んでから続けて言った。

「さっき君が弾いた二曲を聴いたが、君は進む道を間違えているのじゃないかなと正直感じたのです。そのまま学び続けていっても、有名になるどころか、これで食っていくなんであり得ない。一例を挙げれば、君が弾いた『病中吟』で、外弦の第一ポジションの人差し指と中指の間は、半音か全音か分かるかい」

「ちょっと……分かりません」

劉先生が何気なく言った言葉が、私には耳に轟く落雷のような衝撃だった。八歳から二胡を習い始めてからすでに五、六年経っており、自分の中ではできる限りの努力を払ってきたつもりでいる上、ある一定のレベルまでも達したのではないかと自負しているところでもあった。結局根本的に間違っていると今や言われ、それでこれからは何の希望があるというのか。ここまで思いを巡らして、思わず涙ぐんでしまった。と同時に先生の目の前という状況下であり、何とか涙をこぼさないように我慢していた。

そして劉先生はまた続けて言った。

「一目で君は将来性がある音楽家の卵だとわかった。正義感があってやる気もある。努力さえすれば、絶対に成功できるはず。信じてくれますか、僕が人を見る目を。あなたが来る前にもう何人かの人から生徒さんを紹介されたけれど、一人も気に入らなかった。僕はそういう人なんです。気に入らなきゃ弟子を受け入れない方がましだと思います。一人でも気に入ったら、持っているものを一つも残すことなく悉く教えるつもりです」

「やり方が間違っている私は、まだやり直せますか」

先ほどの指摘が気になり、私はやはり心配になって確認の意味で聞き返した。

「大丈夫。まだまだ若いから直そうと思えばまだ間に合うと思うよ。ただし君は、入門からやり直す必要がある。それに、私の言う通りにやらなければ……」

先生の顔が少し緩んで、言い続けた。

「さっき君の演奏を聴いて一つのことを考えていてね、君に時間と精力を費やすのに価値があるかどうか。間違ったやり方を根本から直すって、確かに相当の手間がかかるんだぞ。今はもう決めました。試してみよう」と

「劉先生、それではこの私を弟子に受け入れてくださるのですね」

受け入れていただけないのではないかと、さっきからずっと心配していた。

「試してみようと言っただけですよ。こうしましょう。まずは、三つのルールを決めましょう。それを全部問題なくクリアできたら、正式に弟子入りの約束をしましょう。一つでもクリアできなければ、もう来なくていいです」

と劉先生は真剣な顔でそう言い放った。

さすがに名声高い先生だけあって、今までの先生とは本当に一筋違うことを実感した。前の先生は一度もあんなに厳しい要求を言い渡すことがなかった。どうした訳か知らないが、これより以前のどの先生よりも若いこの青年の前に立ち、私はまるで偉人を前にしているような気さえした。心の中では尊敬の念でいっぱい会話をお互いに恐縮してやまなかった。それで三つの要求どころか、弟子入りが叶えば三十でも三百でもぜひその通りにやり遂げようという思いしかなかった。

それで私ははっきりと答えた。

「劉先生、どうぞおっしゃってください。おっしゃる通りに守らせていただきます」

「よろしい」

そう肯定的に賞賛のお言葉をいただいたのは、今晚はこれで二回目ではなかったろうか。それから先生が続けてその要求を言い渡した。

「それでは第一に、毎週日曜日の午前に必ずレッスンに来ること。風の日も雨の日も関係な

く。できるかい？」

「はい。できます！」

「第二に、必ず私の指定した宿題を完成させること。私が練習しろという曲をしっかりと要求通りに練習してくること。同時に練習してもいいと言わない限りでは、何の曲であろうと一切弾いてはいけないこと。守れるかい？」

「はい。しかし、もし演奏のオファーが来た場合、どうすればいいのですか？」

そのことだけは、私には少し懸念するところがあった。

「暫くは演奏のお誘いが来ても断りなさい。人の前では一切弾かないこと」

「はい。承知しました。その点についてもお約束します」

「第三に、私が授業中に出した要求に三回説明してもその通りに成し遂げられなければ、君は自分ではもう来るのを遠慮しなさい。いいですね」

ここまで来た以上はもう戻る道はない。躊躇してたまるもんか。自分でも自分が先生の要求通りにできない可能性があるとは信じたくない。元々強情っ張りな私は、ここでさらに意地を張り、齒を食いしばって言った。

「はい、おっしやる通りにやって見せます。先生の要求通りにできなければ、先生の弟子になる資格はないと覚悟しています」

「よし。今日ははじめての面談になるな。今日の日曜日からレッスンを始めよう。君もそれまですこし準備しておきなさい。準備だと言っても、まずは心構えが大事だということだな」

劉先生はそう言い終わると立ち上がった。それを見た私も即座に立ち上がって楽器を片付けて体に背負った。そして家族のお一人一人に「おじさん、おばさん、お兄さん、お姉さん」と呼びながらお辞儀をしてお別れのご挨拶をした。劉先生は私が家の入り口を出るまでずっと見送ってくださった。

外はもう真っ暗になった。街灯に映えながら歩いていると感無量になり、希望か失望かはつきりしないもやもやとする感情で胸がいっぱいになった。今後二胡を手にするこの私の人生はどうなるのだろうか、いや、どう進むべきなのだろうか。この劉先生については到底まだまだ十分な信頼がなく、彼についていけば夢が本当に叶うのだろうか等々、いくら考えても心の中ではやはり疑問符ばかりなので、結論を出すのはまだ早く、今に見てろよと自分で自分に言い聞かせるしかなかった。

家に戻ると、父と祖母は私の帰りを待ちきれなくとても心配そうな様子であった。私は劉先生の家に赴いて弟子入りを頼んだ始終を述べると、父は、

「そんなの、うそだろう。進むべき道を違えたって？ とっても上手じゃないか。最初からやり直すって、今までの苦労は全部無駄だっていうのかい。もう、この先生やめたらどうだ

い」

心細がる私ではあったが、やはりついていって教わりたいと心の中では固く思っていた。良い先生に出会えるチャンスに恵まれるのは、やはり有り難い事だ。夏先生が極力劉逸安先生を推薦して下さった以上、私はそう簡単に諦めるわけにはいかないと思った。

父の話を聞いて、すこし思いを巡らしてこう答えた。

「いいえ。あの劉先生は前の先生三人とも違う感じがする。ちょっと先生について頑張ってみようと思う」

父は私が小さい時から持っている二胡への無二の気持ちを十二分に熟知している。私が自分でやってみたいと言った以上、もう反対の言葉を何も言わなかった。

所詮、これから支払う代価といってもせいぜい私はもっと努力するだけだろう。それ以上の犠牲は何もないからリスクなど全然ない。二胡で有名にならなくても失業する心配もない。その当時中学卒業生にせよ仕事は国によって割り当てられることになっていた。

またたく間に次の日曜日がやってきた。私は朝六時に起床し、洗面と朝食を済ませると、すぐさま二胡を背負って劉先生のお家に向かって出発した。明け方の街頭はとても閑静で子鳥が陽気に囀っている。私は歩きながら小石を拾って、鳥を狙って投げたり道路沿いの木を蹴ったりして歩いていた。まだやはり子供だった。

八時過ぎ頃に、青山橋にある劉先生の家に着いた。劉先生は私が約束通りの時刻に来たと見て、とても喜んだ。私は中へ入り、一通りのご挨拶をしてから腰掛に腰を下ろして姿勢を正して劉先生の講義の開始を待っていた。劉先生は枕元から二胡を一式持ってきた。八角型の筒を有する二胡で、私には初見で、とても好奇心をそそる作りとなっている。劉先生がその二胡を手にして魅力溢れる音色を次から次へと出してくる演奏を聴いては、私は口も心も信服させられた。つい何日か前までにあった先生のことを信頼できるかできまいかとの自分の考えに心が後ろめたくてたまらなくなった。その音色が私に与えた感動が余りにも根強く、今でも心に鮮明に刻んでおり、それからの生涯の演奏においても、ずっと八角筒の二胡を愛用する訳となっている。

レッスン中、先生が、私に弓の持ち方や引き方を含め、右腕をリラックスしてやや下方向きにせよとの正しい姿勢等について、胡弦の持ち方と押さえ方及び正確な指の間隔などについて基本から一つ一つ克明に指導して下さった。

休憩の合間に劉先生は私に1962年に催された「上海の春全中国二胡コンテスト」の盛況や、先生が最も敬服している二胡演奏家の王国潼先生のことや、二胡最新作『三門峡狂想曲』や『豫北述事曲』について色々とお話をしてく下さった。劉先生のお話を聞き入った私はまるで仙境にでも立ち入ったように夢中になり、先生のお話に酔い痴れていた。

レッスン後、先生は一冊の二胡教材を取り出して私に宿題を言い渡した。音階のことや弓の動かし方、指の押さえ方についての練習用曲目が宿題であった。教材の表紙には『二胡のラジオ講座』張韶著とあり、私が初めて目にした正式に出版された二胡専門の教科書であり、私にとって初めての練習曲集でもあった。

こうして、私の二胡がやがて正規化された訓練の道へと足を踏み入れたのであった。それから私は風であろうと雨であろうと、天気のことを一切気にせずに決まって毎週日曜日の午前、先生のお家にレッスンを受けに行った。いつからか道路沿いの木を数えながら歩くようになり、525本目はかなり樹齢がありそうなヒメツゲの木で、歩道に凹んだ庭に植え付けられている。毎回ここまで数えると、劉先生のお家がもうすぐだと分かり、まるで待ち望んだ曙の光が見えたような気分になり、心の中は喜びに満たされるようになるのであった。

それからの数年の間、私は本当に先生と約束した通りに、酷暑厳冬にかかわらず、風に吹かれようと雨に叩かれようと、一回も授業をさぼったことはなかった。その上完全に先生の言い付け通りに練習を積み重ねていき、先生の出した要求も一度も三回も繰り返させることがなかった。劉先生が当初から言い渡した「取り決め三か条」を、私は自分の変わることはない強い意志と根気強さによって、本当に掛け値なしに断固として実行したのであった。劉先生も自分の約束を忠実に守っており、全精力を傾けて私を指導した。おかげで私の二胡も見ると自分に腕が上がったのがよく分かり、それに演奏できる曲目も短期間でその曲数が貯まっていったのであった。我々の第六中学校のある祭日祝いの夕べで私は舞台上がって、『拉駱駝（駱駝を牽く）』と『山村変了様（変貌した山の村）』を演奏した。儲坤元先生がそれを聴いた後、

「君は確かに軌道に乗ったな！」

とわざわざコメントをくださったのであった。短い言葉ではあったが、中には肯定、称賛、安堵、希望など様々な複雑な心情が織り込まれており、私には大変奥深い感想であった。

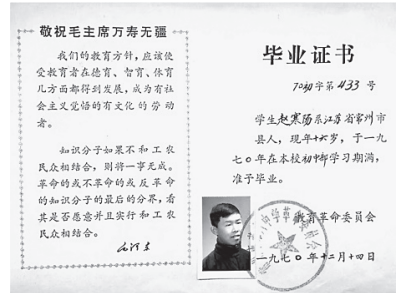
早いことに1970年1月に、私の中学三年目第一学期の学期末に際し、常州市革命委員会により常州市文工団の創設が決定され、常州市内にある各中学校から学生を募集する運びとなった。選考グループが我々六中にやってきた時、学校側は各クラスの文芸に積極的である学生達を集めて選抜試験に参加させた。何セットかの選抜を経て、結局二十数名の学生の中から最終的に二人の採用が決められた。一人は尚志芬さんで、もう一人は私であった。

そのことが私の将来に直接影響を与え得るであろうと判断し、慎重に考えなければいけないと家族で考えた。第一に、知識青年の「上山下乡」の政府の呼びかけによって私も中学卒業後に農村に派遣される運命になるであろうことを心配し、第二に、私の「二胡で飯を食べていく」という志も達成できる。父親も再三の考えを重ねた結果、最終的に常州市文工団に入るこ

とに賛成してくれた。私自身にとっては、文工団に入る最大の目的は、プロの二胡の先生より専門的な指導をさらに受けることができるであろうことに尽きている。それで1970年3月に、私と尚志芬さんは卒業する期日を繰り上げて常州市文工団に到着を報告し、入団手続きを済ませた。そして私は中学生活に終止符を打ち、正式に文工団の少年団員になったのであった。

注

- 1) 初中 chūzhōng 中国では当時、小学 xiǎoxué 5年(同じ小学校に初小 chūxiǎo、高小 gāoxiǎo とある)、中学 zhōngxué 4年(同じ中学に初中、高中 gāozhōng とある)の9年間学校教育を施行していた。
- 2) 紅衛兵 hóngwèibīng 紅衛兵、中国文化大革命当時、腕に紅衛兵の腕章をつけて革命運動をする学生達のことを言う。小学校5年生から紅衛兵をやっているのもあり、腕に腕章をつけて紅衛兵をやらないと、いじめられることがあった。
- 3) 劉天華 Liú Tiānhuá (りゅう てんか、1895年2月4日-1932年6月8日) 北京大学二胡教授、二胡独奏曲10曲を残した中国現代二胡の先駆者である。
- 4) 工宣隊 Gōngxuānduì (労働者毛沢東思想宣伝隊) 文革当時は、労働者階級はもっとも革命的な階級であり、知識人はブルジョア階級とされ、小学校から大学まですべて労働者の工宣隊によって管理、支配されていた。
- 5) 6) 学工 xuégōng、学农 xuénóng、学军 xuéjūn (労働者に学び、農民に学び、軍人に学ぶ)とは、主に学生を指導、管理するために文革後期に行われたものだが、学軍は今でも新入生に対する入学教育として中学から大学まで行われている。
- 7) 插隊 chādùi (農村の人民公社の生産隊に編入すること)、知青 zhīqīng (農村に行く小学生以上の卒業生のことを言う)、上山下乡 shàngshānxiàxiāng (山の農山村に行き、辺鄙の農村に行くことを言う)とは、ほぼ1969年頃、文革によって中国の工業や商業などの生産が停止状態になり、学校の卒業生は働く場所がほとんどないため、中国の農村を建設せよ、農民達に読み書きを教えよなどのスローガンのもとに都会から大量の卒業生が広大な農村へ散っていた。それまでは下放 xiàfàng といい、意味がやや違う。下放とは思想改造のために苦しい農村生活を味わい、懲罰という意味も含んでいるが、知青は同じ苦しい農村生活を強いられるが、懲罰の意味はそれほどではない。



原文

原文

第六章 中学

我的初中是在常州市第六中学读的¹⁾，这所中学的前身是武进私立芳晖女中，成立于1925年7月，现已更名为常州市田家炳实验中学。我之所以就读于此，原因还在于我的第三任二胡老师——储坤元。

自从我在杨明德老师那儿满师以后，大约有一年多的时间没有找到合适的老师，二胡基本上是靠自学，进步不大。当时我们几个喜爱音乐的哥儿们经常在一起举办“音乐会”。当然，这不是那种在音乐厅举办的正规音乐会，而是大家定期地聚在一起，轮番演奏，互相观摩而已。

当时我家已搬到劳动新村，我们刚搬去的时候，这里还十分地荒凉，只有孤零零的四幢楼房并排地矗立在马路边。这条沙石马路连一盏路灯都没有，对面就是大片的农田和乱坟岗。在天黑风高之夜，还真能看到鬼火荧荧，好不吓煞人也！

楼后有一大片空地，原先是盖楼房时堆建材用的。每逢夏季，家家都是早早的吃罢晚饭，大人们搬一张竹躺椅，孩子们拎一个小板凳，聚在这个空场上，等待着“故事会”或“音乐会”的开场。因为那个年代人们家中还没有电视机，连收音机都不多见。因此，聚在一起讲故事、拉琴唱歌就成了这一带居民们主要的娱乐活动了，这片空地也就成了居民们的社区活动中心了。

每天的活动，都是隔夜安排好了的。根据昨天之约，今天应该是“故事会”，可主讲者迟迟未到，于是老人们就先讲开了，讲《嫦娥奔月》、《吴刚伐桂》，讲《聊斋》、《三国》，山南海北地谈开去。但孩子们大都不爱听，叽叽喳喳地吵。有人不耐烦了，跑去叫主讲者，这是一个三十岁左右的大汉子，不等他吃完饭，硬是请了来。大家一下子就安静下来，只见他大手将嘴一抹，接着昨天的故事讲下去。也不知他从哪儿听来、看来那么多新奇的故事，什么《梅花党》、《福尔摩斯》、《一只绣花鞋》等等，讲得在场的人如痴如醉，吓得孩子们不敢一个人回家撒尿。

我们也经常开“音乐会”，演奏的人员并不固定，通常是我拉二胡，父亲吹口琴，还时常邀请吹笛子的、弹琵琶的、拉二胡的，以及唱歌的朋友们前来助兴。我们拉《洪湖水，浪打浪》、《小曲好唱口难开》，也拉锡剧《双推磨》，有时也奏上一曲《紫竹调》什么的，引来阵阵的掌声。我有一个吹笛子的朋友，比我大两岁，笛子吹得在当时可谓是高手，我们常在一起开“音乐会”，互相很是敬慕。有一次我应邀去他家，看到他家中真是穷得一无所有，连坐的地方都没有。我实在为他的才能而感到不平，想买一支好笛子送他，可突然听说他犯了错误而被学校开除了，遂渐渐地与他疏远了。还有一个会唱歌的姑娘，家住在水门桥附近。她的声音甜美极了，只要她来参加我们的音乐会，大家的情绪都会比平时高涨十倍。但半年多后，她就不来了，后来听说她嫁到

外地去了，我从此再也没有见过她，只留下了美好的回忆。这种“音乐会”与我们如今在音乐厅举行的音乐会相比，不论在形式、意义上；还是在思想、目的上，都不可相提并论，但我总觉得儿时的“音乐会”更接近于音乐的本原。它是那么快乐，那么尽兴，那么无私，那么完全没有功利的目的。每次故事会或音乐会结束了，大家渐渐散去，我总是喜欢一个人继续呆在空场上，仰面朝天，数着天上的星星，心中回想着方才的紧张与欢乐，其乐无穷。

在我家楼西头住着父亲厂里的一位同事，名叫张其仁。他是一位音乐发烧友，家里有着当时很罕见的唱机，就是那种播放胶木唱片的机器，还有扩音设备、音箱等等，都是自己组装的，还有许多78转的和33转的胶木唱片。虽说是单声道的，但这套音响在当时就算是发烧级的设备了。尤其是小提琴协奏曲《梁山伯与祝英台》、交响序曲《嘎达梅林》，听起来真是催人泪下、动人心魄。为此，我常到他家去听音乐。每逢我们开“音乐会”，他也总是到场，听完后还要点评一番。有一次，他带来一位特殊的听众，是位印尼华侨，也是一位音乐爱好者。他听完“音乐会”，好像觉得不甚满足。等众人散去后，他对我说：你的二胡拉得是不错，但都是些歌曲，你拉过什么独奏曲吗？

“什么是独奏曲呢？我一个人拉的曲子难道不算是独奏曲吗？”我疑惑地问道。

“你啊，还是见识少。独奏曲就是专门为二胡写的曲子，你拉的歌曲是为唱歌的人写的曲子，不是专门为二胡写的。学拉琴，就要学拉独奏曲，才算是正规的学习道路。”这是我学琴后听到的少有的批评意见。

“可谁来教我拉独奏曲呢？以前我的两位老师都不会拉独奏曲。”我真诚地向他请教。

“好，我来给你介绍一位老师，他叫储坤元，是方辉女中的数学老师。他在上大学的时候，曾经和著名二胡演奏家张锐先生的侄女是同学，因此就跟张锐先生学了几年二胡，他的水平我敢说在常州是数一数二的。”

我一听，心中兴奋不已，恨不得马上能见这位储老师，就催着他说：那太好了，你现在就带我去吧。这位先生哈哈一笑，抬起腕上的手表看了看，说：你真是心急，现在都快十点钟了，怎么着也得明天再说吧。要知道，当时能戴上手表的还真不是广大的“无产阶级”呢。

“那明天你一定要带我去啊。”我心里真有点迫不及待。

“好，明天吃过晚饭我带你去。”

因为当时正处在“文革”中停课闹革命的阶段，学生们都不上学了，只是每周一次返校听革命形势教育。第二天，我既不用上学，练琴也练不下去，就盼着太阳早点落山，吃了晚饭好去见老师。好不容易熬到夕阳西下，我草草地吃过晚饭，那位华侨先生果然如约而至。就这样，他带我带到了芳辉女中。

这所中学其实就在我父亲工作的单位附近，因为“文革”停课的原因，学校里显得冷冷清清。我们顺着甬道转到后院，有一排陈旧的平房，住着学校的几位老师。储老师家住着里外两间

平房，家中有储师母和一个孩子，地方很是窄小。来了客人家中坐不下，总是坐到旁边的食堂里去。偌大的餐厅空无一人，倒成了储老师家临时是会客厅了。

储老师见老朋友带了一个孩子来访，很热情地接待了我们。听这位印尼华侨先生介绍完我的情况，储老师笑了一笑，说：唉！那还是多年前上大学时跟张锐先生学过几天，这么多年不拉，我都忘得差不多了，我们还是互相学习吧。那时候人们都牢记毛主席的教导：“虚心使人进步，骄傲使人落后。”所以两人见面，总是说互相学习、互相帮助等等。

储老师又说：你先拉拉看，我也学习学习。我就拉了两首自认为拿手的歌曲，储老师听了说：嗯，蛮不错嘛。你拉过什么二胡独奏曲吗？

“没有，我不知道什么是二胡独奏曲，老师也没有教过我。”我如实地回答。

“唉！可惜这些曲子现在不能拉了，都是封、资、修的大毒草，遭到了批判。谁要是再拉，给红卫兵²⁾听到了可能会惹麻烦，所以我索性就不拉琴了。”说到这里，储老师有些伤感，心中似有不平，但小小的我又怎能理解呢？

“储老师，你能收下我这个学生吗？我特别想把二胡学好。”我恳切地请求道。

“我们互相学习吧。现在反正学校也不上课，这里也没人，你愿意来拉琴，每天下午都可以来，我们一起拉吧。”储老师讲话时嘴角总是含着笑，语言中还带着浓重的宜兴口音，显得非常和蔼可亲。

从此，我每天下午都拿着二胡到储老师那儿去学琴。储老师不愧受过名师的指点，是见过大世面的人，讲课、拉琴比起杨老师来，又高明了许多。储老师看过我的二胡后说：你的这把二胡虽然不错，但并不是一把独奏二胡，这是拉锡剧用的主胡。我这儿有一把独奏二胡，你看看。说着，储老师拿出一把紫檀木的六角二胡来。这是一把老琴了，木色已经变得紫里发黑了，一拉起来，声音圆润、醇厚，是把难得的好琴。每次储老师都用这把二胡给我上课，教我拉二胡独奏曲《北京有个金太阳》、《子弟兵和老百姓》等等。后来也教我拉刘天华³⁾的二胡作品，没有出版的谱子，父亲专门用硬纸给我抄了一本《二胡曲集》，其中有刘天华先生的十首作品，以及阿炳的三首二胡曲，还有《河水》等。我在储老师的精心指导下，二胡的演奏水平又有了进一步的提高。

几个月后，学校复课闹革命。我也小学毕业，面临着上中学的问题。储老师就说：上我们这个学校吧，今年起芳辉女中改为常州市六中了，也招男生了，而且接管我们学校的正好是你父亲工作的大成一厂工宣队⁴⁾。

在“文革”中，工人阶级是领导阶级，任何学校、机关等上层建筑单位，都被“工人阶级毛泽东思想宣传队”所接管，一切行政、教学等工作，全部由进驻的工宣队说了算。接管市六中的大成一厂工宣队队长是父亲的好朋友许寿坤；副队长叫董彩珍，是一位胖胖的老太太，一个不折

不扣的三代贫农，在旧社会苦大仇深的老工人。

这大概是最佳的选择了，就这样我义无反顾地进了市六中。当时学校实行军事化管理，全校分成四个连，实际上是四个年级；每个连又各分成四五个排，也就是四五个班。我被编排在四连四排，全班59名同学，班主任是殷宝章老师。从我保存至今的一份全校学生名单中可以看出，在1967年9月份新学年开学时，常州市六中共有初中二十四班，1346名学生。

开学后，虽然课表上有语文、数学、物理等课程，但由于“文革”运动尚在轰轰烈烈地展开，所以教学仍然很不正常。一个学期二十周，学工、学农、学军⁵⁾大约要占去三分之一到二分之一的時間。其实我们这些孩子们都挺喜欢学工、学农、学军的，就是因为可以不上课，到工厂、农村、部队去玩儿。苦是苦点，但也乐趣无穷。

学工，按照当时的规定是到接管本校的工厂去进行。我们一开学，首先就到大成一厂去学工。全连233名学生被分配到了厂里的各个部门，我和顾建一等四五位同学被分到了食堂。

大成一厂的食堂可大了，担负着全厂三千多工人的吃饭问题。我们的任务是淘米和择菜，由一个董师傅负责传、帮、带。这个董师傅就是我们学校工宣队副队长董彩珍的哥哥，是个胖胖的、说话大嗓门的老师傅。他对我们可好了，每当大盘子的鸡蛋蒸出来，董师傅常常用刀子给我们几个小家伙每人划一块吃。可要是谁的工作干不好，他的大嗓门也必定把我们训得熊熊的。我们每天早上进了食堂，先到董师傅那儿报到，他总是捧着个紫砂茶壶在悠闲地喝着茶。然后我们其中的两个人抬一个大漏盆，差不多有家里洗澡的澡盆那么大，到米库去抬米。米库的师傅搬起一袋子米“哗”的一声倒进去，五十斤米只装了大半盆，又打开一袋倒进去一半，这一盆子米足有七八十斤。我们两个人将它抬到一个大水池边，放上半池子水，再把淘米盆抬进池中，用一个长家伙在里面搅。搅了一会儿，把水放了，再开水龙头洗第二遍。就说这个水龙头，也差不多有消防用的龙头那么大，放一池水只要几分钟。洗完后将米倒入一个大木桶里，再去米库抬第二盆。一上午起码要如此洗上四盆，大约总共有三百多斤米吧。这可是个力气活，每次总要把我们累得浑身大汗、气喘吁吁地。将米洗完后，还要分米。在那些足有一平方米大的蒸屉中，整齐地排列着一百多个金属搪瓷盆。再用一个铁皮小量杯，一杯是二两米，往每一个搪瓷盆中倒一杯。接着拉过一根橡胶水管来，象龙点头似地向搪瓷盆中加水。这是一个技术活，水加少了蒸出来的饭太硬，水加多了饭又太软。刚开始的时候，总是由董师傅干的，过了好几天才由我们来干。可水加得还是不够均匀，因此蒸出来的饭有的硬有的软。到中午开饭时，也有工人来提意见，说这饭怎么这么软硬不好吃啊。这时董师傅就给人解释说：我们的革命小将来学工，这是培养革命接班人的大事情，有什么做得不到的地方请大家多多包涵。这么一说，大家也就不计较了。

就这样，加完一屉抬到灶上，再加一屉，每顿饭总要干它十几屉。蒸饭的灶可不是用锅烧水蒸的，而是直接由锅炉房通过来的蒸汽。一拧阀门，蒸汽就呼呼地喷出来，可厉害啦，一不小心就会被烫着，所以这个阀门董师傅从不许我们动，总是由他来开的。

淘米做饭的活虽然累点，但跑来跑去干得还有点意思，我总不愿意去择菜。要择的菜有菠菜、韭菜、青菜什么的，总是在地上堆成象小山似的一堆，由两个人负责择。一人一张小板凳，一坐就要坐两个多小时，很闷的，所以每天我总是抢着去干淘米的活。学工一般都是上的白天班，到下午三点半就下班了。但也有派到织部车间去学工的女同学，要上中班，即从下午二点到晚上十点。在两周的学工期中，同学们被分配到了各个部门，平时都很少见面。因此，当学工结束后，大家又聚在教室里时，就感到特别地亲切。

1967年正处于“文化大革命”的中期，上学其实是很轻松的，因为当时提倡“张铁生交白卷”式的学习风气，老师对学生从不要求，愿意学就多学点，不愿意学就少学点。考试得100分也不表扬，得20分也不批评。我在班里虽不是班干部，但学习成绩一般都在85分以上，而且为人比较正直，从不拉拢谁，也不挤兑谁。这样，老师都很喜欢我，但在同学中却只有几个学习成绩较好的人和我比较亲近，大部分同学认为我是一个只顾埋头读书的书呆子，而且还不太合群，因此常在背后笑话我，甚至捉弄我。

上了二、三周的课，到了秋收季节了，学校又组织同学们到郊区的人民公社去学农⁶。清早，大家穿上球鞋，戴上草帽，还带了午饭，到学校集合，排队向劳动的地点进发。同学们在教室里憋了几个星期，走出校园时心里有一种小鸟归林的感觉，一路上嘻嘻哈哈，打打闹闹，活像一群小鸭子。

到了生产大队，队长领着大家来到田边。这是一大片水稻田，今天我们的任务是割稻，每人发给一把稻棘（一种短柄的，刃口上带刷齿的镰刀，专用于割稻子）。刚开始的时候，我们的动作不熟练，前进的速度比较慢，但这毕竟是简单的熟练动作，不一会儿大家就都掌握了。老师还号召同学们进行比赛，看谁割得又快又好。眼看着一大片金黄色的稻田，用不了一个小时就全给放倒了。大家虽然弄得满头大汗、满脚烂泥，腰都直不起来，可情绪却十分地高涨。到了中午，各人坐在田埂上，拿出自己带的午饭吃得津津有味。并不是饭菜好，而是真饿了。吃完饭休息了一会儿，接着再干，直到五点钟收工。大家看着自己的劳动成果，心里都十分高兴，到河边洗洗手、洗洗脚，排好队回家。那时城市小，向外环步行四五十分钟，就是一望无际的田野了，所以我们学农都是排着队步行去步行回的。

第二天，大家照常到学校集合，步行去生产大队。今天的任务是撒肥，就是把农家肥用手掰开了，均匀地撒到田里去。这农家肥是怎样沤出来的呢？早在几个月前，社员们就在田边挖一个大坑，把每户猪圈中的猪粪、村里厕所中的人粪，各家择菜择下来的菜根烂叶等等，都往大坑中填。填满一坑再挖一坑，经过几个月的堆积发酵，就成了优质的天然有机肥了。为了打破同学们怕脏怕苦的小资产阶级思想，在干活前先要背诵毛主席“一不怕苦，二不怕死”的最高指示。然后班长带头跳入坑中，用铁锹往筐里装肥。装满一筐由两个同学抬到地头，分开距离堆在田里。然后同学们再用手将肥料掰成小块，撒入田中。这一切过程全是徒手的，如果有人戴上手套，即

被认为是小资产阶级思想作怪，是要受到批判的。干一天活，手几天都洗不干净，闻闻还是一股臭臭的味道。

一个星期的学农，提高我们的劳动观念，锻炼了我们吃苦耐劳的品格，还使我们领略到了“谁知盘中餐，粒粒皆辛苦”的深刻内涵。

学工、学农都结束了，该安心读书了吧，可又遇上“常州市红卫兵代表大会”要成立毛泽东思想文艺宣传队，到各中小学挑选能歌善舞的队员。到了我们六中，学校把它当作一项政治任务来完成，校长亲自主持会议，经各班班主任推荐，提名了十几位同学去参加选拔。结果只有两人被选上了，一位是尚志芬，另一位就是我。学校里还专门开了欢送会，给我们俩带上大红花，把我们送到“常州市红代会毛泽东思想宣传队”在双桂坊的队部。从此，我就天天背着一把琴，到“红代会”上班了。

在“红代会”毛泽东思想宣传队，每天都进行排练活动，节目无非是宣传毛泽东思想、颂扬“文化大革命”的内容，形式上有声乐、舞蹈、器乐独奏、小合奏，还有快板书、三句半等等。在当时市里所有的文艺团体都呈瘫痪状态的情况下，这就是全市人民文艺生活中唯一的一支演出队伍了。因此演出的日程排得很满，所到之处都受到热烈的欢迎。

在演出节目单上，我的二胡独奏是一个保留节目，曲目有毛主席语录歌、《北京有个金太阳》等等。而且演出还有一个特点，就是跪姿演奏。因为我们经常到工厂、农村、部队演出，大多是在室外的空场上，观众围成一圈就开演，连坐着演奏的凳子都没有。另外，也是为了表达对广大工农兵观众无比尊敬的无产阶级感情，因此“红代会”领导要求我们在演出时，单腿就地跪下来演奏。我们的演出服常常是一身黄绿色的军装，腰扎皮带，头戴军帽。我上台独奏时，总是步伐矫健，“蹭、蹭、蹭”三步并作二步走到圈子中央，左手持琴，右手一个军礼，身体还要向左右略为旋转，以表示对全场观众的尊敬。接着报幕员上台报曲名，演奏者的名字是不报的，那个年代不能有“要名要利”的资产阶级思想。报完幕，我单腿跪下，铿锵有力地拉将起来，每次演出都搏得了观众们热烈的掌声，常常要返场二三次。我的节目如此受广大工农兵群众的欢迎，也奠定了我在“红代会”宣传队的地位，市“红代会”几次给我所在的六中发表扬信，以表彰我的积极表现。

给我印象最深的一次活动，是去常州罗墅湾军用机场的慰问演出。那是在“八一”建军节的前夕，下午一点多钟，部队派车来到“红代会”毛泽东思想宣传队的队部，那是两辆运兵的卡车。这时我们全体队员身着军装，由队长带领排队上车，坐得整整齐齐，一路上还唱着革命歌曲，真有点招摇过市的味道。

到了罗墅湾军用机场，解放军战士们列队欢迎，我们在队旗的带领下步入会场。这一场大家演得十分卖力，战士们掌声也非常热烈。观众们似乎是在演出前宣布过纪律的，只要节目一完，总有一个排长或连长带头鼓掌，众战士马上热烈地跟上，带头人一停，场内立即安静下来。

演出结束后，首长们上台和演员们亲切握手，然后合影留念。等大家卸完装，有一位连长将我们带到了食堂。还没有跨进门，扑面而来的香气引得我们馋涎欲滴。走进食堂，只见一大盆一大盆的白菜汤面放在方凳子上，热气腾腾地，还浇上了不少香油，怪不得在门外就闻到那么香了。这是我靠二胡演奏“挣”来吃的第一顿饭，是那么香、那么鲜，一边吃着，一边不由得心潮澎湃，更坚定了我想要终生从事二胡演奏的决心。

从罗墅湾回到家里，已是晚上九点多钟了，但激荡的心情却久久不能平静。与奶奶和父亲绘声绘色地谈路上的风景，讲演出的盛况，当说到那一大盆一大盆的、喷香喷香的白菜汤面时，更是激动无比。这一夜，我很晚很晚才睡着。

在宣传队差不多一年的时间，是在紧张、愉快的生活中渡过的。当“红代会”领导宣布“毛泽东思想文艺宣传队”已经出色地完成了宣传任务，自即日起解散，队员们各自回到所在学校继续上学时，大家都还依依不舍，女同学们甚至还流下了眼泪。当我踏进六中四连四排的教室时，老师和同学们都起身鼓掌欢迎，好像迎接英雄归来似的，因为在我回校前，“红代会”的红色表彰信早已送到了校领导的手中。

尽管学校的课程已进入了初二阶段，但只用了一个星期，我就跟上了，第一次测验就得了平均83分，最低的英语也得了75分。可见当时文化课的进度之慢，就说数学吧，我学到初三毕业，也只不过学完了一元二次方程。

初二这一年，我总算在学校安心地读了两个学期的书。平时放了学，三天两头还到储坤元老师那儿去学琴。但渐渐地，发现储老师教我也有些力不从心了，经常不过是两个人在一起拉拉琴、聊聊天而已。当时六中还有一位会拉二胡的老师叫宗麟，负责学校艺术小组的活动，我也常常和他在一起探讨二胡，可谓是忘年之交。

初二的第二学期，在我的艺术生涯中发生了一件举足轻重的事，就是拜常州著名的民乐指导刘逸安为师。现在想来，这是在冥冥之中注定要发生的事情。而事情的发生，却是如此地偶然。

当时我家所在的劳动新村，房前屋后尽是空地，所以家家户户都养着十几只鸡。在当时经济和供应相对低下的年代来说，这是家庭副食品的主要来源。那时候政府也鼓励居民们养鸡养鸭，以缓解副食品供应的紧张状态。因此，每月每户凭供应本可以低价购到10斤饲料，或是米糠，或是麸皮。也有一些经济困难的家庭，买了麸皮回家就直接熬粥喝了。

一个星期天的上午，我去广化桥的粮食供应处购买饲料。一到桥上，就看见供应处门口排着长长的队伍。那个年代物品特别缺乏，就连这米糠或麸皮，晚去了也是买不到的。我不敢怠慢，赶紧跑过去就站队。

哎呀，这个队真长啊！没有一两个小时可轮不到呢！我心中正在焦急之时，却听到不远处传来笛子和琵琶的声音。不，还有二胡在里面！我的心一下子就被拉了过去。一看前面的队伍起码

还有十几米长，于是就对站在身后的一位中年妇女说：阿姨，我排在这儿啊，一会儿我就回来。那位女同志还真好，看我一个孩子，挺有礼貌的，就说：你去吧，快点回来啊。我谢了一声，就循声到了街对面。原来这座广化桥在改建时加高了，修了长长的引桥，使原先桥两旁的房子大大地低于桥面的高度，站在桥上几乎能跳到房子的屋面上去。就在这些大大低于桥面的平房中，有一户人家聚了几个人在合奏。虽然关着门，但悠扬的音乐声仍袅袅地从开着的窗户中传出来。他们正在拉《紫竹调》，这首乐曲我很熟悉，也经常夏天乘凉时的音乐会中演奏。我静静地听着，心中恰似甘泉流过，感到清新无比。

一曲终了，我抬手敲了几下门。门开了，只见仅有二三平米的小屋中坐着三个二十岁左右的小青年，手里都拿着乐器。他们见门外站着一个小孩子，以为是顽皮的学生来捣乱，于是没好气地问：你有什么事？我赶忙解释说：噢，是这样，我在对面排队买饲料，听到你们优美的琴声，特来看看，我也会拉二胡，刚才你们拉的《紫竹调》我也会拉的。那几个小青年将信将疑地说：你也会拉二胡？那你来拉一段。哈！我来听的目的就是为了能在人面前拉一段，于是二话不说，拿过二胡就拉了一曲《良宵》。

几个小青年听完后惊讶地说：哟，你拉得比我们还好呢。你在哪儿住？我们怎么一点都不知道你？我笑了笑，说：我住在劳动新村。其中有一位小青年说：你晚上有空吗？我带你去见见我的老师吧。我一听说带我去见他的老师，想来一定是位了不起的高人了，心里很高兴，就痛快地答应了。

告别了三个小青年，回到马路对面，找到帮我看队的阿姨，道了谢，继续排队，顺利地买回了饲料。

傍晚吃过晚饭，我带上二胡，准时来到广化桥下的那间平房门口。门开着，只有那位要带我去见他老师的小青年正在吃饭。见我来了，热情地招呼我进屋。我问道：你一个人住在这儿？他说：是啊，我前几年初中毕业后插队⁷⁾到了农村，现在父母亲都过世了，就给我留下这一间小房子。我从农村回来后，也没有工作，靠父母亲单位上一点救济金生活。平时没事，就弹弹琵琶，和几个朋友玩玩乐器。言语中不由得透露出一丝悲哀的、无可奈何的神情。我又问道：你老师是谁啊？住哪儿？

“我老师叫夏志文，就住在桥下的木匠街上。我们一会儿就去，我已经和他约好了。”他一边说，一边加快了吃饭的速度。

吃完饭，我们一块儿来到木匠街的一个院子门口。他冲里面喊了一声：

“夏老师。”

“噢！请进。”随着声音，一位三十多岁的中年人从院子里迎了出来。

夏老师热情地将我们领进屋。那是一间老房子，背阴的，因此屋里很暗。墙上挂着一把红木琵琶，衬着很陈旧的老家具，似乎在向客人们展示着主人深厚的文化积淀。

众人坐定，互相作过介绍，接下来自然是听我拉琴了。在一位素不相识的老师面前演奏，我心里没底，因此拉得不够自信。夏老师听完，既没有拍手叫好，也没有一口否定，而是沉吟了半晌，才缓缓地说道：嗯，怎么说呢？要说你这么小的年龄能拉到这个水平，也算是不错了。但我听来总感觉到还缺了点什么，到底是没有经过专业的训练啊。我一听，就迫不及待地说：夏老师，我就拜您为师，进行专业训练吧。夏老师笑了笑，说：“我教的是琵琶呀，不会教二胡，不过我可以给你引见一位二胡老师。但这位老师我也没有见过面，据我的朋友讲，他是常州城里拉得最好的二胡老师了。”我向来是急性子，一听说要给我引见一位二胡老师，就迫不及待地说：“太好了！夏老师，您这就带我去吧。”夏老师笑了笑，答道：“哈哈！你还真性急，今天恐怕太晚了。再说这位老师住在青山桥，我们骑车去也得有四十分钟左右的路程呢。这样吧，明天我们早早地吃过晚饭，你到我家来，我带你去。好不好？”

第二天傍晚，我草草地吃过晚饭，骑着父亲的自行车来到夏老师家，夏老师已经吃完饭在等我了。两人骑上车，向青山桥进发。我不认识路，只是跟着夏老师走。当经过红梅公园旁边漆黑的一片小树林时，我不禁害怕起来。心想：怎么这么远啊，这个夏老师不会在骗我吧？又一想，人家骗我一个小孩子干什么呀？别“狗咬吕洞宾，不识好人心”吧。

两人在路上足足骑了有四五十分钟，终于到了青山桥。刘逸安老师的家就正对着青山桥，左右都是店面，唯独这一个门是住家，所以特别好认。

这也是一处老房子了，户门还是那种老式的、带门白的木板门。夏老师过去敲了几下门，门开了，走出来一个比我大不了三四岁的小青年。夏老师就问：

“请问这里是不是刘逸安的家？”

“是的，他现在不在家，我是他弟弟，你们有什么事可以跟我说。”开门的小青年答道。

“噢，是这样的。我也是个朋友介绍的，说刘逸安是常州城里二胡拉得最好的老师，本来早就想来拜访，正好我发现了一个学生，很有这方面的才能。”夏老师说着指了一下我，“今天特地带来，想拜刘逸安为师的。可不巧，他不在家。”夏老师有些惋惜地说。

“我哥哥平时总也不出去的，不是在家拉二胡嘛，就是摆他的围棋子儿，今天刚巧有点事出去了。这样吧，他回来我跟他他说一声，你们明天再来，我叫他在家等你们。”刘逸安的弟弟说。

夏老师想了一下，说：

“明天我有点事，来不了，叫这个学生自己来，行吗？”

“行，行。我叫刘逸康，我一定给你转达到。对了，你贵姓啊？”刘逸康一面做着自我介绍，一面很热情地问道。

“我叫夏志文，这位学生叫……？”原来夏老师连我的名字都不知道。

“我叫赵寒阳，寒冷的寒，太阳的阳。”我自报着姓名。

“好，好。你叫夏志文，他叫赵寒阳，我记住了，你们明天还是这个时候来吧。”刘逸康始终

面带微笑地说。

我们辞别了刘逸康，转身上车返回，大家都不说话，默默地蹬着车，各人想着自己的心事。因为远道来而未遇，心中不免有一种淡淡的惆怅，但又带着某种美好的希望。人不就是因为这明天的希望才活着的吗？如果没有了希望，人就活不下去了。

第二天我上学坐在教室里，心中总惦念着晚上要去拜师的事，因此上课都显得有些心不在焉。下午放了学，早早地叫奶奶做饭，自己又练了一会儿琴，准备在老师面前露一手，别再象去夏老师家的那次一样心慌没拉好。

下午五点多钟，我草草地吃完了晚饭，背上二胡就出发了。听说我一个人要穿城去那么远的青山桥，奶奶和父亲不放心让我骑自行车去，那就步行着去吧，反正身上有的是使不完的劲。其实乘一路公交汽车只要化八分钱，就可以从我家门口直达青山桥，但那时候家里的经济条件差，来回一角六分钱，差不多可以吃一天的菜了。

我背着二胡，昂首阔步地踏上了拜师征程，心中有一种任重而道远的感觉。路实在是不近，我差不多步行了一个半小时才到了青山桥，即便是年轻，也有些气喘吁吁了。到了刘家门口，一敲门，仍是刘逸康来开的门，一见是我，便热情地将我迎进屋中，说：

“你来啦，我哥哥都等你半天了。”

“喔，对不起，今天我是步行来的，走了一个半小时才到。”我说着，只见从里屋走出一位二十二三岁的青年人，个子不是很高，圆圆的脸，穿着十分朴素。微笑地对我说：

“我是刘逸安，你就是赵寒阳吧。来，进屋坐吧。”

“刘老师好。今天夏老师有事不能来，我就一个人来了。”我一边说，一边在寻思，要说是常州城里二胡拉得最好的老师，怎么也得要三四十岁的吧，怎么这么年轻？好像是我的哥哥差不多。

进了屋，发现这房子四周没窗子，白天也要开灯，唯一通气的地方就是对着街的户门。里外两间，住着一家五口人：刘逸安老师本人加上他的父母亲、还有一个弟弟、一个妹妹，因此在过道中都搭着板床，居住条件十分艰苦。

两人坐下，我简要地介绍了自己学琴的经过。刘老师就说：来吧，我听你拉拉。我从琴套中拿出二胡，刘老师接过去看了一下，说：你这是一把戏曲二胡啊。我说：是的，这还是我第二任老师送我的礼物呢。接着，我认真地拉了《良宵》和《病中吟》。由于做了充分的思想准备，所以自我感觉颇佳。但刘老师听完后，表情严肃地沉思不语。虽然只是短短的一二分钟，可我感到仿佛过了一年。因为在平时我只要出去表演，大多是深受赞扬的，而刘老师听后却如此沉思不语，莫非是看不上眼，不肯收我为徒吗？

终于刘老师说话了：

“你觉得拉得怎么样？”

“还行吧。”我不好意思说感觉很好。

“你是不是特别想把二胡拉好呢？”刘老师问道。

这还用问吗？我不是特别想把二胡拉好，还能走这么远的路来拜师吗？于是我坚定地回答：

“我在八岁刚开始学二胡的时候就发誓要吃这碗饭，要拉出名的。只要能把二胡拉好，吃什么苦我都不怕。”

“好！”刘老师赞了一声，继续说：

“我从小学二胡，志向也很大，就是想考音乐学院。在1967年我高中毕业后就报考了上海音乐学院，居然也考上了。但由于‘文化大革命’，上海音乐学院取消了这批考生的入学。就这样我失学在家，一呆就是两年。因为我家庭成份的关系，现在看来要实现我的理想是很困难了。所以我一直想收一个学生，把我的这个理想传下去，最终得以实现。”

我静静地听着，不由得对刘老师肃然起敬起来。刘老师喝了一口水，接着说道：

“刚才我听你拉了两首曲子，觉得你走的路子不对啊，要是这样学下去，是没有希望能吃这碗饭的，更别说能拉出名了。举一个例子，你拉的《病中吟》，外弦上把位一二指之间是半音还是全音啊？”

“我……不知道。”

刘老师低低地几句话，在我听来不亚于平地惊雷，震耳欲聋。自己从八岁开始学习二胡，到现在也有五六年了，我自认为在二胡上是尽了力的，也觉得有了一些水平，原来连根本的路子都走得不对，那还有什么希望呢？想到这里，眼泪都含在眼眶里，只是强忍着，不好意思当着老师的面掉下来。

只听刘老师又说：

“从第一眼看见你，我就感觉到你是个好苗子，人很正，有决心，只要好好努力，一定是可以成功的。我看人是很准的，你信不信？在你之前，已经有几个人给我介绍过学生了，我都没有看上。我这个人就是这样，看不上的宁可不教，看上了的，我会毫无保留地教的。”

“那我的路子走得不对，还能学出来吗？”我不忧虑地问。

“不要紧，你还小，要改还来得及。但你必须从头学起，按我的要求去练。”刘老师笑了一下，接着说：“刚才你拉完了我一直在想，值不值得在你身上化这么大的功夫。因为要把你的路子改过来，是一个不小的工程。现在我决定要试一下。”

“刘老师，这么说您答应教我了？”我一直担心刘老师不肯收我为徒。

“我说的是试一下。这样吧，我有三个要求，你要是全做到了，我就教你；要有一条做不到，你就不用来了。”刘老师很严肃地说。

高人就是不一样，我以前的三位老师从来就没有这么严肃地对我提过什么要求。不知为什么，在这位比我过去的三位老师都年轻得多的小青年面前，我仿佛是站在一位伟人面前，心中充

满着诚惶诚恐的感觉。别说三个要求，就是三十个，三百个，我也一定照办不误。我恳切地说：

“刘老师，你说吧，我一定做到。”

“好！”刘老师第二次如此赞道，“第一，你每个星期天的上午必须来上课，风雨无阻。能做到吗？”

“能！”

“第二，必须按照我布置的作业、按我的要求去练，我不叫你拉的，一律不要拉。能做到吗？”

“能。可如果要演出怎么办呢？”这一条我有些顾虑。

“暂时不要去演出，也不要拉给别人听。”

“好，这点我也一定做到。”

“第三，我在课上给你提的要求，如果说了三次还做不到，那你自己就别来了。能做到吗？”

既然已经走到这一步了，还有什么可犹豫的呢？我就不信我做不到，我的犟劲也上来了，咬了咬牙说：

“能做到，要是做不到，我就不配当您的学生。”

“好吧，我们今天算见个面，从这个星期天开始正式上课。这几天你准备一下，主要是在思想上做好准备。”刘老师说完站起身来。我一看，也赶紧站起来，收拾了一下乐器，背在身上，向一家“伯伯、伯母、哥哥、姐姐”逐一告别，刘老师将我送出大门。

天完全黑了，我一个人走在路灯下，思绪万千，心里说不上是希望、还是失望；也不知今后学习二胡的路会怎么走、该怎么走；这个刘老师，到底我对他还不是十分地了解，他能把我教出来吗？想想心中实在没底，只能走着瞧了。

回到家里，父亲和奶奶正等得着急，我说了去刘老师家拜师的情况，父亲还说：别故弄玄虚吧，什么路子走得不对，我就觉得你拉得挺好听，要从头学起，以前学的都白费了？算了，还是别去学吧。我虽然心中没底，但还是愿意去学，毕竟找一个好老师不容易，夏老师极力推荐了刘逸安老师，我不能就此错过！我想了一下，对父亲说：不，我感觉到这位刘老师和以前的三位老师都不同，我想去试试。父亲也知道我从小对二胡充满了热爱，既然我想要去试试，他也就反对了。毕竟除了我付出一些辛苦以外，并不需要付出什么别的代价，也不需要承担什么风险。即使二胡最终没有学成，也绝无失业之忧。因为当时学生中学毕业，就业是由国家包分配的。

转眼到了星期天，我六点多钟就起床了，洗漱早餐完毕，背着二胡就上了路。清晨街上没有多少人，小鸟欢快地鸣叫着。我一路走着，总也闲不住。一会儿拣块小石子打打鸟，一会儿走过去踢一下树，到底还是个孩子啊。

八点多钟，我到了青山桥刘老师家。刘老师见我准时到来，很是高兴。我进了屋，将家中人员一一叫过，就规规矩矩地坐在凳子上等着上课。刘老师从床头拿过一把二胡，我从未见到过这

种八角型琴筒的二胡，不觉大为好奇。听刘老师用这把二胡发出那种极富魅力的声音，我开始心服口服了，心中不禁为前几天还对老师有过不信任的想法而感到深深地内疚。这种声音给了我深刻的印象，以致在我后来的演奏生涯中，一直喜欢用这种八角型琴筒的二胡。

在课上，刘老师教我持弓、运弓的正确方法，要求右臂放松和下沉；还教我规范的持琴和按指动作，以及准确的指距关系，等等。在课间休息时，刘老师给我讲1962年“上海之春全国二胡比赛”的盛况；讲他最敬佩的演奏家王国潼，还有二胡的最新作品《三门峡畅想曲》和《豫北叙事曲》。听得我如痴如醉，如游仙境。下课时，刘老师拿出一本二胡教材给我布置作业，是几条音阶、运弓和按指练习。在教材的封面上印着《二胡广播讲座》、张韶著，这是我看到的第一本正式出版的二胡教材，也是我第一次拉练习曲。

从此，我的二胡学习走上了一条正规训练的道路。每逢星期天的上午，我风雨无阻地到刘老师家上课。不知从哪一次开始，我总是数着路旁的树走到青山桥的。而第525棵是一棵老黄杨树，栽在凹进人行道的一个院子里。每当我数到这棵树的时候，就知道刘老师家快要到了，如同看到了希望的曙光一样，心中充满了欣喜之情。

在此后的几年中，不管是风吹雨打，也不论是严寒酷暑，我真的没有缺过一次课；而且完全遵照刘老师的嘱咐去练习；课上所提的要求也从未让老师说过三次以上，刘老师的“约法三章”我凭着自己的恒心和决心不折不扣地做到了。刘老师也信守了自己的诺言，尽心尽力地教我，使我的二胡水平迅速地提高，很快又积累了一批演出的曲目。在六中的一次节日联欢会上，我上台演奏了《拉骆驼》和《山村变了样》，储坤元老师听后，说：“你上路了。”这简短的四个字，包含着肯定、赞扬、欣慰、希望等复杂的深刻内涵。

1970年1月份，我初三第一学期的期末，常州市革命委员会决定成立常州市文工团，并在全市的中学里招收学员。当招生小组来到市六中时，学校领导组织各班的文艺积极分子参加了考试。经过几轮的选拔，在二十多名学生中最后录取了两个人，仍然一位是尚志芬，另一位就是我。

这件事事关我的前途，不可不慎。父亲一是考虑我中学毕业后可能要“上山下乡”，二是也遂了我“要吃二胡这碗饭”的理想，经过再三考虑，最终同意我进常州市文工团当学员。而我去文工团的主要目的是：能得到专业剧团二胡老师的指点，以便在演奏水平上取得更大的进步。于是，在70年的3月份，我和尚志芬提前从六中毕业，结束了我的中学生活，正式到常州市文工团报到，当了一名小学生。